

27 第12580號

附 第二〇四號

大正五年三月九日 接受

管正

森田

大正五年十二月三日

在遼陽

領事館事務代理古谷榮一

外務大臣法學博士子爵本野一郎殿

太興合名會社商租土地ニ對シ日支共同

審判方ニ關スル件

曩ニ在奉天南滿洲太興合名會社カ同地太平寺
住職本端ト問ニ商租契約ヲ締結セル當館管
内遼中縣所在ノ同寺カ領地ニ關シテハ所在農民等
ノ反抗甚シク今尚紛争中ナルトヨ今同別紙寫

通り楊爲楷戴子昌ナルモ等遼中縣太平庄十
九ヶ村ヲ代表シ太興合名會社濱名寛佑ヲ相手
取遼陽地方審判廳ハ土地取戻シニ對スル訴訟
ヲ提起シ同審判廳ハ之ヲ受理シ目下開審準
備中ニテ第一回公判ヲ本月十九日開始スルハ若
シ追テ公文ヲ以テ會審方照會スルキ旨同審判廳
長劉大魁ヨリ此程内話有之候處土地關係民
事訴訟ニ關スル會審手續ニ關シテハ本年五月八
日付政機密送第一五號ヲ以テ矢田總領事代理
宛御訓令ノ次第モ有之施行細則等尚御詮議
中ノ事ニ有之候ノミナラス本商租契約ニ就キテハ
交渉問題トシテ矢田總領事代理ト支那官憲
トノ間ニ於テ現ニ交渉中ノモノニ有之候ニ付此際訴

訟問題トシテ會同審判ニ附セントスルカ如キ申出ニ固
ヨリ同意シ難キ義ト思考致候得共劉審判
廳長ノ内話ハ單ニ劉一個人トシテノ内話ナリシテ以テ
之ニ對シ何等回答ヲ與ハス只參考迄ニ聽取ニ置
ク旨申述置候間右御言上本件ハ其内話ノ如ク
近日何等カノ形式ヲ以テ支那側ヨリ會審方照會
シ來ル事ト被存候ニ付其場合取計振リ折返
シ御指令相成候様致度此段及稟申候

敬具

本信寫送付先 在支公使 矢田總領事代理

本館 日本書院

寫

為陳訴日人濱名寬佑等侵占地畝事

一係爭地

坐落及四至坐落遼中縣五區平安堡太平庄前二道溝後二道溝金二道溝匡家窩棚土堡子八砂堡子東高庄子西高庄子木耳崗子蔡伯街叔家菴鬼尔坨曹家窩棚張家窩棚丁家窩棚賞家窩棚後崗子等村東至土堡子西至蔡伯街南至匡家窩棚北至後崗子
畝數約計十萬餘畝
價額約計二百萬元

二本案事實

因去年十月間突有日人多名在小新立屯租賃房屋到高庄子等十九村繪圖測量並出佈告自稱

在遼陽日本帝國領事館

係太興合名會社商人濱名寬佑已与太平寺僧人本端訂立契約以日金十萬元租妥太平寺地東西寬三千里南北長二千里令民等到該會社交租今夏四月間在土崗子後崗子二道溝等村埋立木標九月又出佈告聲言木標之外各屯地畝均為會社高租民間如種標外地畝速到會社交租上則七元中則五元下則三元否則驅逐出境於今冬十月間又在先埋木標之外將大石崗子巴音台等村另埋新標亦圈入範圍之內民等以財產權利攸關奉 高等審判廳指令按照中日土地訴訟法起訴

三請求之理由分二項陳述於左

第一項太平寺地該日人無高租理由分別條列於左

一太平寺地係前清皇室私產向歸三陵衙門管理
民間承種此項地土均有三陵衙門租照有永不撤
佃字樣是前清皇室有所有權民間有永佃權
本瑞本一守侍寺之僧止有受租利益其管理權
則歸三陵衙門其處分權則歸前清皇室與
本瑞直接商租何能有效

二日金十萬元不為不鉅發給之時必有經手及過
付之人何以竟交本瑞一人之手並無其他証人

三商租地土必須雙方官府立案且使用官契紙方
為正當辦法今該日人所持白紙契約且未經
中國官府立案何能發生効力

四土地授受必須有所有權親臨地點指明段落
取具四隣押結方為有效如果本瑞有正當商

在遼陽日本帝國領事館

租之權應於履行契約時挺身而出何至隱匿
不見本瑞無商租之權已屬顯然

第二項太平寺地毗連各村各項地畝不應包套之
理由分別條列於左

一太平寺地僅四百另二日人且無正當商租之理由
其餘民產有紅冊餘租升科隨缺伍田王產福
陵昭陵等地各有業主各有証據何得包套
十九屯之多况十九屯之外又圈入巴音台火石
崗子等村

二太平寺地零星散布十一屯之中每屯或十畝
或八畝不等即令有所有權此正當商租亦須
官府丈量清楚劃清界限將民間創墾
之費退還方無謬獨何將自行埋立木標

據為已有

四證據

紅冊餘租升科等地縣署均有納糧冊為証
政廳有戶管存根冊為証民間各有戶管大照為証
隨缺伍田等地各旗署均有冊載為証民間有租
照為証福陵昭陵太平寺等地三陵衙門有冊
為証民間有租照為証王產地王府有冊為証
民間有租照為証因証據繁多一時未能搜集
俟開審後再行呈驗

五請求之目的

據以上理由不但十九屯之地不應包套即太平
寺之地亦不應商租懇請

廳憲按照法理判令日人取消契約退還所佔地

在遼陽日本帝國領事館

啟並將小新民屯公社撤回實為德候謹呈

遼陽地方審判廳公收

原告人 楊為楷 係遼中縣太平庄十九
戴子昌等 村代表人

中華民國五年十一月 日

被告人 濱名寬佑等 太興合名會社總理人現
任奉天小西門外浩
然里

南滿洲於土地商租權御保護租成度義付稟請

人

九月二十九日接

1-1906

0260

南滿洲ニ於ケル土地商租権御保
 護相成度儀ニ付稟請
 謹テ稟請仕候昨年日支新條約ノ訂立ニ當
 リ弊社ハ率先以テ條約ノ期待ニ應シ盛京
 省遼中縣下ニ於ケル東西三十支里南北ニ
 十支里ノ土地ヲ商租致候處商租ヲ以テ領
 土剥奪ニ遇ヘルカ如ク思惟スル排日的一
 流官憲ノ理由ナキ抗議ト為リ又豫テ其ノ
 土地ヲ横奪セシト覬覦シ居タル奸官賊民
 ノ反抗ト為リ并ニ此等ノ者ノ煽動ニ出ツ
 ル無知農民ノ暴擧ト為リ候ハ誠ニ意料ノ

外ニ候其ノ官憲抗議ノ次第年ニ談抗議ノ理由ナキ所以ハ去ル七月七日附陳情書ニテ上申仕候通ニシテ在奉天帝國總領事ヨリモ己ニ業ニ完膚ナキマテニ反駁ヲ加ヘサセラレ候處一面商租地所在ノ地方官憲等ハ力ヲ盡シテ弊社ヲ誣害讒傷シ居民ヲ煽動シ日本人ニシテ村落ニ入ラントスル者アラハ殺傷スルモ咎ノナシトマテ極言スルニ至リ或ハ暴民ノ嘯集ト為リ或ハ凶器ノ示威ト為リ或ハ狙撃ト為リ終ニハ警察ノ手ヲ以テ弊社使用吏那人ヲ暴民集團ノ前ニ引致シテ其ノ毆打ニ委シ人事不省

(協信社印行)

ニ陥ラシメテ後奉天ニ縛送シ獄ニ投スル等ノ暴威ヲ取テシ殆ト傍若無人ノ有様ニ候今ヤ又村民ヲシテ事由顛倒ノ訴狀ヲ提起セシムルニ至リ弊社ノ迷惑無此上候要スルニ彼等ノ謀畧ハ明白ニ有之候方ヨリハ外交的抗議ヲ以テ永ク弊社ヲ掣肘シ前面ヨリハ紛擾ヲ交錯セシメテ以テ弊社ヲ壓倒シ終ニ商租權ヲ抛棄セシメント圖ル者ニ有之候弊社ハ飽マテ正義ハ最後ノ勝利者ト自信罷在候ニ村民提起ノ訴狀ノ裏面ニハ奉天ノ諸官憲三陵衙門ノ官人并ニ地方官吏等孰レモ存在スル次第ニ候ハハ

官民同腹如何ナル偽證ヲモ作製シテ法廷
 ニ提出スルニ容易ナルベク候ハハ弊社ハ
 一ニ帝國政府ノ積極的御庇護ニ頼リ對抗
 スル外無御座候之ヲ既往ニ察シ現在ニ視
 ルニ彼等官憲ハ我ニ對シ常ニ機先ヲ制ス
 ルニ勉メ其ノ口實存セサル者ハ誣用讒傷
 事實ヲ虚構シテマテ抗議先制ノ具トスル
 情况ニ候ハハ弊社法廷ニ立ツ上ニ於テ特
 別ノ御庇護トシテ左記三件ニ依リ此際先
 制ノ地歩ヲ占メ置カレ度奉願候
 一、遼中縣知事及其ノ警察署長ノ妄狀ヲ責
 メ罷免ノ御交渉相成度候

(協信社印行)

一、外交的懸案トシテ未タ落着セサルニ横
 合ヨリ村民訴狀ノ提起ト為レルハ如何
 且ツ責任アル官憲が従来皇室ノ私産ト
 シテ抗議主張セル土地ヲ今ヤ村民ハ其
 ノ大部ヲ民有トシテ起訴ス之ニ對シ官
 憲従来ノ主張ニ於ケル責任ノ自覺如何
 ヲ詰責急迫相成度候
 一、商租地ハ今方ニ係争地タリ本年ハ收穫
 ハ乏ラ日支兩官憲ノ保管ニ置キ并ニ係
 争間今後ハ播種ヲ為シ可カラサル旨御
 嚴誅相成度候一、本年收穫物ノ差押ハ縱
 令實行不可能ナリトモ主義トシテ御責

徹相成候様致度候
 尚法廷上ニ於ケル日支會審ノ組織ニ就テ
 ハ申迄ノ義ニハ無之候モ篤ト御諭議ノ上
 御底護ヲ加ヘラレ度候本件ノ情勢上民團
 側ノ會審官ニハ到底公平ノ見地ハ望ミ得
 ラレス候
 爰ニ弊社ハ法廷ニ理非ヲ争フ覺悟ハ仕候
 モ奉天支社ヨリノ近信ニ據レハ奉天督軍
 張作霖氏ハ帝國總領事ニ對シ本件ハ鄭家
 屯事件ノ結了ヲ待テ假如民國側ニ不利アリ
 リトモ解決方取計フヘキ旨言明相成リタ
 ル趣ニ候一面ニ村民ノ訴状ヲ見一面ニ督

(編信社印行)

軍ノ此言ヲ聞クハ如何ナル次第ナルカ了
 解難致候モ前ニ申述候通總領事ヨリ彼ノ
 抗議ニ對シ克膺ナキ迄反駁ヲ加ヘラレ候
 夫先ナレハ之ニ乘シ急追セラレハニ於テ
 ハ屏息スルヨリ外ナキヲ以テ村民ノ出訴
 ハ此ノ氣勢ヲ轉嫁セシメシメタノ督軍ノ甘
 言ハ此ノ氣勢ヲ弛緩セシメシメタノ機略
 ナランカト疑ハレ候併シ督軍ノ言明ニ候
 ヘハ取ツテ以テ質ト為スニ不足ナキ義ニ
 付暫ク誠意ト認メ此ノ際至急解決方取計
 フ様御嚴促相成度候其ノ解決ノ捷徑ハ前
 記三箇條ノ御交渉ト共ニ左記二箇條ノ同

意ヲ獲ルニ因リテ得ラルベク候
 一、商祖地ヲ称シテ皇室ノ私産ト言ヘルハ
 其ノ出所ニ陵衛門ニ有之候處談衛門ハ
 今ヤ其ノ主張ノ理由立タサルニ當惑致
 窃ニ情ヲ通シ来リ居リ候モ督軍ノ禁遏
 ニ依リ弊社ト直談スルヲ得ス候故ニ督
 軍ヨリ談衛門ニ對シ弊社ト解決ヲ熟議
 スヘキ旨命令シ故ナキ干涉ヲ加ヘサル
 ニ於テハ皇室私産云々ノ問題ハ容易ク
 議了可致候本條ハ要スルニ弊社ト三陵
 衛門ト直接交渉シ得ル途ヲ開カレタキ
 願意ニ御座候

(協信社印行)

一、村民ヨリ訴状ヲ提起セリト云フモ談村
 民ハ未タ訴状ヲ提起スルマデニ弊社ト
 接觸シ居ラサルノミナラス其ノ代表者
 中ニハ抗争ヲ不利トシテ竊ニ妥協ヲ弊
 社ニ圖ル者モ有之要スルニ官憲ノ煽動
 ニ依リテ弊社トノ間ニ溝渠ヲ横ヘ居候
 次第ニ付督軍ヨリ村民ニ直接弊社ト妥
 協ヲ試ムヘキ旨下令シ干涉煽動ヲ除カ
 ルニ於テハ協定必シモ難事ニアラス
 ト存候本條ハ要スルニ弊社ト村民ト直
 接熟議シ得ル途ヲ開カレタキ願意ニ御
 座候

右ニ途ニ據リ交渉熟議ノ末意見終ニ纏マ
ラサルモノアルニ於テハ三陵衙門モ村民
モ出訴ニ可然弊社ヨリ出訴スルコトモ可
有之候儻クハ亦出訴ヲ待タス日支西官憲
ノ調停ヲ煩ハシ命ヲ聽キテ折合ノ場合モ
可有之候相互ノ接觸此ニ至ラスレテ後未
經過ノ如ク曠日彌久徒ラニ民國官民ノ機
略ニ惱マサレ候ハ弊社ノ堪ハ得サル所ニ
候前述五箇條ノ願意モ究局スル所帝國官
憲ノ御勢威ニ頼リ彼等官民ノ機略ヲ打破
シ本然ノ道理ニ依リ既得ノ權利ヲ確保致
度迄ニ御坐候其ノ本ヲ申セハ單ニ土地ヲ

(協信社印行)

租借シテ農業ヲ經營スト云フニ止マリ簡
單ナル一私事ニ過キス候處今ヤ情勢ノ繫
カル所一般邦人前途ノ商租得喪ニ影響ス
ル一珍事ト相成弊社自ラ責任ノ重大ナル
ニ恐懼罷在候尚ホ既往現在ノ情况及事由
等別冊稟請事由説明書ニ詳述仕候ハ、篤
ト御賢察ノ上前顯ノ次第ニ對シ特ニ積極
的御庇護ヲ賜リ度謹テ稟請仕候也

大正五年九月

南滿洲大興合名會社々長

飯田 延太郎



外務大臣子爵石井菊次郎殿

附屬書

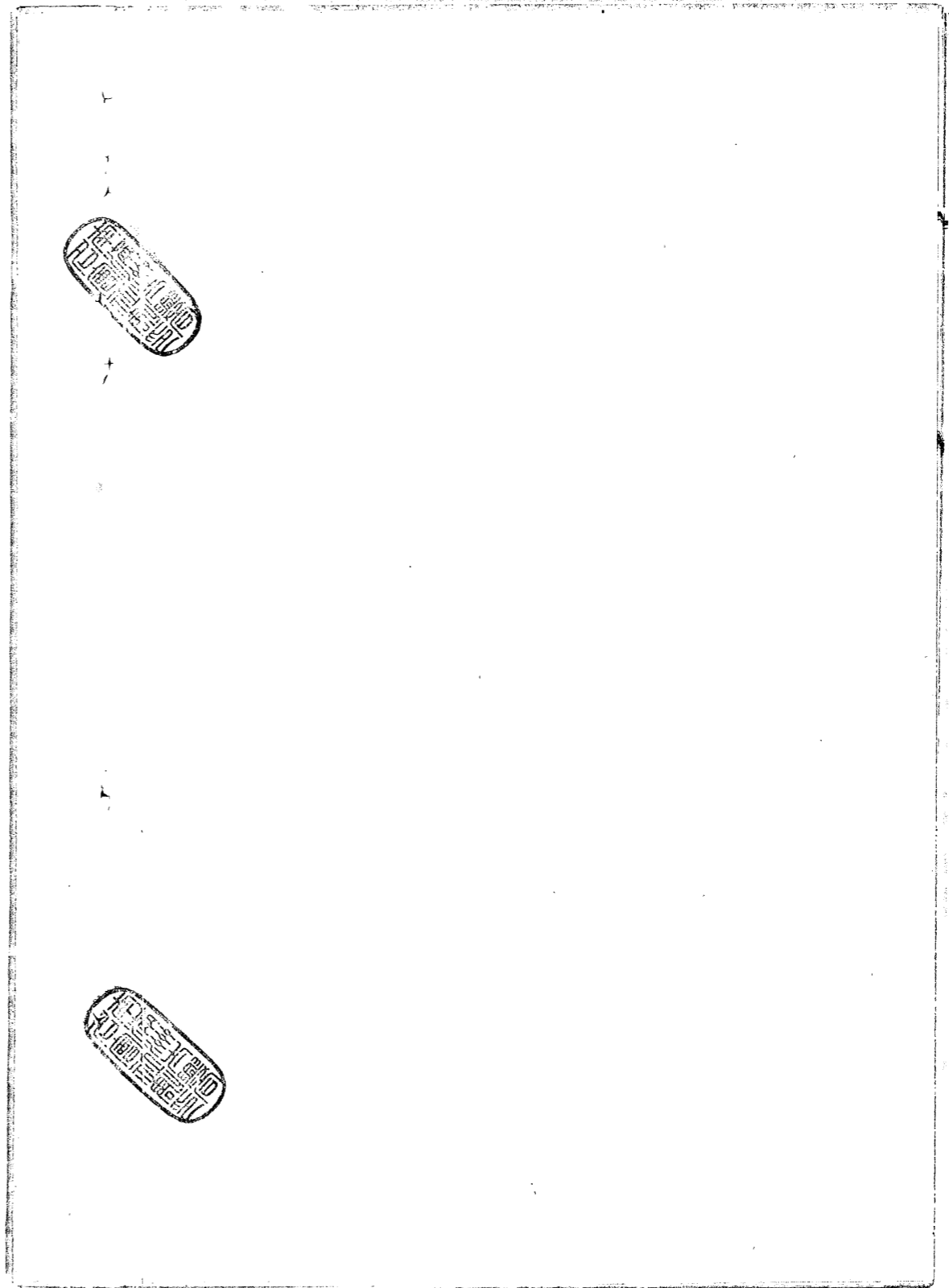
稟請事由説明書

別冊

(協信社印行)

1-1906

0267



1-1906

0268

稟請事由説明書

九二九
物
...

1-1906

0269

稟請事由説明書

謹テ爰ニ稟請ヲ説明具陳仕候抑モ弊社土地商租ノ事ハ極ノテ簡單ノ意義ニシテ土地ヲ租借シ其ノ上ニ農業ヲ經營セント云フニ止リ聊モ特異ノ行動ニ出ラタル次第ニハ無之且ツ該地ハ公冊及官文書等ニ於テ太平寺ナル一寺院ノ所屬地ナルコトヲ立證シアルモノニ候ヘハ該寺住持ト弊社トノ間ニ訂立シタル商租契約タル他ヨリ苦情等申入レラル、餘地ナキ者ニ候處商租以來己ニ一年有餘左ノ三者ノ凡ユル妨

害ヲ被リ殆ト商租ノ事實ヲ踐蹂シ去ラレ
 ントスルノ災厄ニ遭遇罷在候
 甲、土地商租ヲ以テ民國領土ノ剝奪ニ
 遇ヘルカ如ク思念スル民國官憲一
 流ノ排日的妨害
 乙、奸官賊民相結托シ太平寺々領ヲ
 横奪セント、宿望ヨリ未レル反
 抗
 丙、官憲ノ煽動ニ因レル村民ノ躁暴
 右三者ノ為ス所ヲ視ルニ聲援互ニ相勵マ
 シ兇焰互ニ相煽シ誣罔讒傷至ラサル莫ク
 毎ニ帝國總領事ニ對スル抗議ノ上ニ詭辯

(協信社印行)

ヲ舞ハシ以テ弊社ノ為サントスル所ヲ掣
 肘シテ動クヲ得サラシメ亦毎ニ村民躁暴
 ノ上ニ凶威ヲ振ハシ以テ弊社ノ行ハント
 スル所ヲ抑壓シテ進ムヲ得サラシメ曠日
 漏久籍リテ以テ弊社ヲシテ厄ニ困ニ財ニ
 屈シテ商租權ヲ拋棄シ終ラシメント企ツ
 ルコト其ノ心事誠ニ明白ニ有之其ノ商租
 以來爰ニ一年有餘弊社ノ遭遇セル内外表
 裏ノ妨害抑壓實ニ次下各項申述アルカ如
 キ顛末ニ有之候
 (一) 太平寺住持逮捕命令 商租契約成立ノ
 當初太平寺住持及關係人一同我カ帝國

総領事館ニ出頭シ事實ヲ陳述シ契約書
 ニ御認證相受ケ候處其ノ事偶民國官憲
 ノ知ル所トナルヤ住持ヲ以テ土地偷賣
 者ト為シ固賊ヲ以テ目シ急遽逮捕ノ嚴
 令ヲ發スルト共ニ本件ニ何等關係ナキ
 無辜ノ者十餘人ヲ縛シテ獄ニ投スルノ
 狂態ヲ演シ候其ノ際住持及關係人ハ辛
 クモ逮捕ヲ逃レ候か今ニ至リ猶行衛不
 明ニ候
 右ノ出未事タル獨リ弊社ノ災厄ナルノミ
 ナラス商租ヲ企畫セル幾多邦人ノ進取ヲ
 挫折セシメ商租ニ應セント希望セル幾多

(協信社印行)

支人ヲ戰慄セシメタルモノニシテ其ノ関
 スル所決シテ鮮少ニアラス夫ノ條約ニ依
 リ折角獲ラレタル商租權モ此ノ一事ヲ以
 テ早已ニ踐踏セラレタリト申候モ過言ニ
 ハ有之間敷單ニ弊社ノ事ノミニハ無御座
 候
 (二) 商租ヲ以テ賣買ト誣罔ス 前項逮捕命
 令ヲ發スルト同時ニ民國官憲ハ帝國官
 憲^{在奉天總領事}ニ對シ日本臣民ハ條約ニ依リ
 土地ノ商租ヲ為シ得ルモ賣買ヲ為スラ
 得ス即本件ハ賣買ニシテ條約違反ナレ
 ハ其ノ契約ハ無効タルベキ者也トノ意

義ヲ申越シ候之ニ對シ總領事ヨリ本件
 ハ商租ニシテ賣買ニアラスト覆牒相成
 候趣兼リ候處今モ尚ホ民國官憲ハ盜賣
 トカ倫典トカ勤モスレハ之ヲ文ニシ誣
 罔ヲ改メス候
 (三) 契約ニ隱情アリトハ誣罔 商租ハ公然
 之ヲ為シタルモノナルニ民國官憲ハ必
 隱情アワテ存スヘシト讒誣致居候が其
 ノ理由トスル所ハ隱情ナシトセハ何故
 ニ太平寺住持ハ民國衙門ニ契約ノ允可
 ヲ請ハスシテ逃奔セシヤト云フニ在リ
 テ逃遁ノ責ヲ弊社ニ嫁シ候處素ト住持

(協信社印行)

ノ逃遁ハ緝捕命令ヲ聞キテ恐怖行衛ヲ
 晦マシタルモノニシテ最初ヨリ逃走ノ
 念アリシニアラス商租契約訂結ノ後モ
 其ノ堵ニ安ニシテ棲マヒタルノミナラ
 ス滞納地租ヲ民國衙門ニ納附シテ契約
 成立ノ上ニ缺點ヲ遺サハル様專心努力
 シタル程ナレハ商租ヲ以テ犯罪視セラ
 レントハ思寄ラサリシ處ニ候去トハ彼
 ノ逃亡ハ民國官憲カ商租トモ賣買トモ
 事相ヲ究メス事理ヲ正サス倉皇トシテ
 逮捕投獄ノ暴威ヲ露ハシタル結果ニ外
 ナラス候ニ其ノ事實ヲ曲誣シ契約ニ隱

情アリナド愚ニモ附カ又言辭ヲ弄シテ
 帝國官憲ニ對スル抗議ノ一節ト為シ今
 ニ尚ホ其ノ詭辯ヲ把持スルハ心外ノ至
 ニ存候
 四、寺領ヲ以テ皇室ノ私産ト曲辯ス
 公冊ノ證スル所官文書ノ示ス所法令ノ
 定スル所寺領ハ寺領ナルニ相違ナク住
 持ハ管理人ナルニ相違ナシ然ルニ民國
 官憲ハ之ヲ曲証シテ前清皇室ノ私産ト
 主張シ住持ニ管理權ナク收租權ナシト
 曲辯致来リ候而モ其ノ論據ヲ明示シタ
 ルコト莫ク其ノ證據ヲ提擧シタルコト

(協信社印行)

莫ク及ツテ一部官人カ寺僧ノ懦弱ニ附
 込ニ其ノ孤立援ナキニ乘シ奸民ト結托
 シテ其ノ領地ヲ横奪セント企テ来レル
 事跡ヲ意外ニモ顯ハシ候事寔ニ呆レ果
 テタル次第ニ候
 右皇室ノ私産ナリトノ主張ハ既ニ完膚ナ
 キ迄ニ論破シ盡シタル所ニシテ過般呈出
 致候處ノ上申書ニ詳細陳述仕置候ヘハ重
 テ茲ニ喋々不仕候且ツ既ニ帝國總領事ヨ
 リ民國官憲ニ對シ餘蘊ナク反駁ヲ加ヘ居
 ラレ候ヘハ民國官憲モ今ヤ屏息スルヨリ
 外ナカルベシト其ノ結果ヲ期待罷在候

若シモ民國官憲ニ於テ彼我ノタメ誠意ト
努力ト有シ候ハ、以上各項ノ事ノ如キ
ハ膝詰談判ヲ為スモ直ニ解決ヲ告グベキ
苦ナルニ徒ラニ弊社ノ行動ヲ掣肘阻止ス
ルヲ以テ能事トスル彼等ハ弊社人ヲ遣ハ
シテ高租地ヲ視セシメントスレハ忽チ抗
議ヲ寄セテ之ヲ掣肘シ弊社員ヲ激シテ疆
界ヲ稽查セシメントスレハ亦忽チ抗議ヲ
致シテ之ヲ阻止ス彼等ノ抗議タル毎回斯
ノ如ク弊社暫ラク抗議ニ敬意ヲ表シテ何
事ヲモ為サ、レハ爾來尅トシテ何等ノ音
沙汰モナシ要スルニ弊社ノ行動ト抗議ノ

(協信社印行)

回数ト正ニ相匹敵スルニ視ルモ既往一年
有餘幾回トナク繰返サレタル抗議ハ取モ
直サス弊社ヲ牽制シテ動クニ由ナカラシ
メントスル企圖ナルコト以テ知り得ヘキ
儀ニ御座候
一面ニハ斯クノ如ク外交上ノ辞令ニ假托
シテ以テ弊社ヲ後方ヨリ掣阻シ一面ニハ
以下叙説スル所ノ如キ悪辣ノ手段ヲ曲盡
シテ弊社ヲ前面ヨリ抑壓シ以テ高租權ヲ
拋棄セシメント畫策ス之ニ對シ弊社ハ帝
國政府ノ積極的庇護ニ頼ルノ外莫ニ致方
ナキ儀ニ御座候彼等カ前面ヨリスル悪辣

手段ナルヤ其ノ例證ノ二三ヲ爰ニ陳述可
 致候
 (五) 家宅搜索及讒構 嘗テ我カ其筋ノ御内
 認テ得テ馬賊襲来ノ際ニ於ケル萬一ニ
 備ヘンタノ廢銃數挺ヲ農場事務所ニ備
 附ケ候固ヨリ萬一ノ用心ニ候ヘハ箱詰
 トシテ戸棚ノ内ニ秘藏シ絶テ人ニ示ス
 コトモアラザリシニ民國巡警等多人數
 ニ依リテ家宅搜索ヲ受ケ之ヲ押収セラ
 レ候當時家宅搜索ノ不穩當ヲ蔽ハン為
 メナルベク彼等ハ作辭ヲ構ヘ某々村落
 ニ馬賊顯ハレテ討伐ニ向フベキノ處銃

(協信社印行)

器不足ナルニ依リ暫時貸與ニ預リタシ
 ト云ヒ証書マテ遺シテ持去タルニ彼等
 ハ縣知事ノ旨ヲ受ケテ其ノ事實ヲ虚構
 シ日人各自凶器ヲ携帶シ各村ヲ徘徊脅
 迫セルニ依リ已ニナク差押ヘタリト報
 告シ知事ヨリ更ニ上司ニ申報シ其ノ報
 北京ニマテ達シ今ニ至ルマテ幣社ノ聞
 エ頗ル宜シカラスト承リ候尤モ其ノ際
 ニ於テ帝國官憲ヘハ直ニ實状ヲ報告申
 上置候ヘハ御諒承ノ事ト存候モ真正ノ
 事實ハ終ニ讒構ニ敵シ得ス銃畧今ニ至
 ルマテ取戻シ得スニテ其ノ儘ニ相成居

候其ノ外弊社ガ居民ノ家屋ヲ搬出セン
 ト試ミタリトカ墳墓發掘ノ意思ヲ包藏
 セリトカ居民ヲ緝縛拷治セントシタリ
 トカ一毫ノ形跡カモ無キ事柄ヲ虚構シ
 毎ニ帝國總領事ニ對スル抗議書ノ附録
 トシテ寄セ来レルニハ只々正義モナク
 公道モナキ國柄ナルニ驚キ呆レル計リ
 御座候
 (六)官憲ハ暴擧煽動 弊社ハ當初ヨリ穩健
 ヲ旨トシ胸襟ヲ披キテ居民ニ接スルニ
 勉メ慰撫ヲモ為シ賑恤ヲモ行ヒ来リ候
 ニ依リ一時形勢頗ル善良ニ向ヒ居民中

(協信社印行)

大半ハ弊社ニ昵近スバク夫々意思ヲ寄
 セ来リ候處遼中縣知事及ヒ其ノ警察署
 長等ハ此ノ形勢ヲ以テ看過スヘカラス
 ト思ヒ候モノカ遽ニ各村ヲ巡視シ代表
 等ヲ呼集シ断シテ弊社ノ所言ヲ聴ク可
 カラスト諭告シ刺サヘ巡警及保衛團員
 等ヲ派シテ各村ヲ遊説セシメ日本人ニ
 シテ村落ニ立入ラントスル者アラハ武
 カヲ以テ撃退シ之ヲ殺戮スルモ咎ヲ受
 クルコト無シ是レ奉天上海將軍張作霖大
 人ノ命令ナリ云々ト大道演説マテ為シ
 ラ暴擧煽動ニ努メタルハ誠ニ捨置キ難

(七) キ事ニ存候
 村民ノ躁暴 前項所陳ノ煽動ニ依リ年
 餘ヲ費シ漸次良好ニ導キ来レル形勢ハ
 俄然一変シテ險悪ノ兆候ヲ呈シ弊社農
 場貞ノ出入ニ對シ鐘鼓ヲ連打シテ村々
 相報シ或ハ小銃或ハ長鎌其ノ他思々ノ
 凶器ヲ執ワテ一大集團ヲ成シ將ニ危ク
 農場事務所ヲ襲撃セントスルニ立到候
 ニ依リ奉天總領事館ニ御保護ヲ仰キ警
 官ノ急派ヲ請願候處遼中縣ハ遼陽領事
 館ノ管轄ニ屬スルヲ以テ奉天ヨリ警官
 ヲ派遣シ難キ旨承リ直ニ職員ヲ遼陽ニ

(通信社印行)

遣シ警部一名巡查二名ノ御派遣ヲ得蘇
 生ノ想仕候當時奉天ヨリスレハ一日行
 程ナルモ遼陽ヨリスレハ二日行程ヲ要
 シ且ツ職員ガ遼陽ニ罷出候ニモ夫レ夕
 ケノ時間ヲ要スル儀ニ付焦眉ノ急一刺
 モ猶豫シ難ク感シ候タメ弊社ハ自衛上
 ニ十餘名ノ人員ヲ急派シテ聲援ヲ添ヘ
 以テ村民襲来ノ氣勢ヲ挫クニ努メ候ガ
 幸ニモ奉天總領事ヨリ張將軍ニ談判セ
 ラレタル結果將軍ヨリ電命ヲ發セラレ
 タルト并ニ遼陽領事館ヨリ警官ヲ派遣
 セラレタルタメ流血ノ慘ナキヲ得候當

時復夕聞捨テ難キ一事ハ該地方管轄ノ
 民國巡警長カ部下巡警ヲ戒ソ日支人衝
 突ノ際ハ汝等ハ総テ制服ヲ脱シ民服ニ
 改メ共ニ俱ニ日人ヲ攻撃セヨ制服ノマ
 ヲニテハ他日交渉ノ折ニ面倒ナレハ須
 ラク此ノ點ニ注意スヘシト令達シタル
 儀ニ候
 (ハ) 狙撃及擬銃 張將軍ヨリハ日人ニ危害
 ヲ加フル勿レト電命シタル趣ニ候モ其
 ノ徹底ハ頗ル疑ハシク其ノ後農場員ニ
 シテ數發ノ小銃狙撃ヲ受ケタル者モ有
 之候又奉天支社理事野口多内カ村民慰

(協信社印行)

換ノ夕ノ現場ニ赴キタル際ノ如キモ數
 十百人道ヲ擁ニテ通過ヲ許サハル外高
 梁中ニ數十名小銃ヲ擬シテ火蓋ヲ切ラ
 ニ計リノ情態ヲ示シ居リ候幸ニ弊社各
 員ニ於テ機宜ノ處置ヲ謬ラサリシタノ
 無事後退スルヲ得タルモ誤ラハ如何ナ
 ル珍事ヲ演出スルカ寔ニ測ラレサル所
 ニ候本項狙撃ヲ受ケタル事實ハ後証ヲ
 賜サニタメ危険ヲ冒シテ其ノ日村長ヲ
 捉ヘ詫書ヲ取り直ニ我カ官憲ニ報告仕
 候又數十名擬銃ノ事實ハ其ノ擬銃者ノ
 人名書ヲ徴シ是亦我カ官憲ニ報告致置

候へハ我々官憲ハ詳細御承知ノ事ト存候
 弊社使用支那人逮捕投獄 弊社使用支
 那人某ト申モ何ノ罪アリトモ判ラヌ
 民國巡警ニ拉去サレ村民集團ノ前ニ引
 致セラレ候ガ巡警等ハ村民ニ毆打脚蹴
 ヲ許シ候タノ足腰ノ立タサルマテニ負
 傷シ人事不省ニ陥リ終ニ奉天ニ縛送セ
 ラレ投獄ノ慘禍ニ遇ヒ候固ト是レ一人
 ノ上ノ出来事ニ候モ外交上ノ慣例ニ於
 テ日本人使用ノ支那人ハ相當ノ手續ヲ
 踏マサレハ直ニ逮捕スルヲ得サルモノ

(協信社印行)

ニ有之弊社ハ急遽我々総領事ニ申告シ
 救護ヲ願出テ総領事ヨリ交渉相成候處
 荏苒決セス二十餘日ノ後初メテ釋放セ
 ラレ候此ノ一事ニ視テモ民國官憲ノ我
 カ勢威ヲ侮蔑スルコト以テ知ラルヘク
 遺憾限り無キ儀ニ存候
 (十) 形勢ノ緩和ト煽動ノ再演 前各項ノ如
 ク左シモニ險悪ナリシ形勢モ理事野口
 多内ガ辛クモ各村ノ巡回ヲ遂行シ弊社
 ノ抱負ト心事トヲ取ツテ慰諭シタル結
 果形勢ノ緩和ヲ来シ各村代表者中ニハ
 民國官憲ノ言フ所ニ據レハ日人ハ居

民ノ家宅ヲ搬出シ墳墓ヲ發掘シ耕地ヲ
汲收シ居民ノタノ立錐ノ寸地ヲモ遺サ
ハルニ努ムル者ナリトノコトナリシカ
ハ吾々ハ衆力ヲ糾合シテ反抗ノ態度ニ
モ出テタルナレ若シ然ラスト言ハバ何
ニソウシモ事ヲ好ム者ナランヤト申
出テタル者モ有之候テ官憲煽動ノ口實
モ畧ホ窺ハルハ處ニ候野口理事ハ遂ニ
各村総代等ノ意見ヲ取纏ソ其ノ奉天ニ
来ルヲ奨憑シ支社ニ於テ今後ヲ熟議ス
ヘク相約シ候處遼中縣知事ノ惡辣煽動
再ヒ復タ行ハレ代表者ノ或者ハ為ニ支

(協信社印行)

社ニ入来ツテ告ケテ云ハク「遼中縣知
事ニ日人ト今後ノ事ヲ協定スヘキ旨ヲ
申出テ指揮ヲ請ヒタル處知事ハ申出テ
排斥シ今年協議纏マルトモ明年ハ必増
租セラレシ明年協議纏マルトモ明年
ハ必辛ラキ目ニ遭ハシ終ニ家宅モ田畑
モ擧ケテ之ヲ失フニ至ラサレハ己マサ
ル可キニ依リ飽マテ反抗ノ態度ヲ持續
シ官憲ノ所為ニ信頼シ断シテ日人ニ接
近スル勿レトノ飭諭アリタレハ各代表
打揃フテ来社スルコトハ取止メトナレ
リト申候

(七) 村民訴状ハ提起 前述ノ如ク弊社ハ村民ト胸襟ヲ披ラクノ主義ニ據リ形勢ヲ緩和シ事態ヲ収束シ来リ候モ民國官憲ノ前後煽動ニ依リテ遂ニ破壊セラレ今ヤ爰ニ村民ノ訴訟ノ提起ヲ見ルニ至リ候其ノ訴状ノ要旨ハ是マテ幾タヒト無ク民國官憲ヨリ帝國總領事ニ對シテ繰返サレタル抗議ノ言辞其マ、ニ有之候處一事異ル所アルハ民國官憲ハ是マテ弊社商租地即太平寺々領ヲ以テ前清皇室ノ私産ト曲辯シ来タ嘗ツテ民地ト立論シタルコトアラサルニ村民ハ訴状ニ

(協信社印行)

ハ數ワルニ足ラサル程ノ僅少地積ヲ稱シテ皇室ノ私産トシ其ノ餘ノ大地積ヲ總テ居民ノ所有地ト主張スル者ニ有之即公冊及ヒ官文書ニ依リテ寺領ト立證セラレタル所ノモノ擧ケテ皆寺領ナラストノ訴旨ニ有之候其ノ論據ノ存スル所亦タ審カニセスト雖既ニ之ヲ法廷ニ出訴シタル以上弊社ハ弊社ノ所信ヲ執ツテ對抗スル外無之候モ普通ノ民刑訴訟ト異リ候ハ、轉タ帝國政府ノ積極的御底護ノ下ニ行動仕度其ノ次第ハ叙テ追フテ可申上候

(三) 督軍張作霖氏ハ聲明 奉天支社ヨリ最
 近到達セル電報ニ依ルニ張督軍ハ帝國
 總領事館員ニ「太平寺問題ハ鄭家屯事
 件結了ヲ待テ假如民國ニ不利ナリトモ
 解決ヲ取計フ可シト」ノ意味ヲ明言シ
 タル趣ニ候モ真ニ解決ヲ欲スルノ誠意
 アラハ鄭家屯事件ノ結了ヲ待ツマテモ
 無之直ニ取計ハレテ可然儀ニ候恐クハ
 曠日彌久弊社ヲ疲勞セシメン策ナルニ
 ハ無之候哉一方ニハ村民ニ出訴ヲ煽動
 シ一方ニハ斯ノ如キ甘言ヲ放テルハ心
 事了解ニ苦シ所ニ候モ兎ニ角督軍ノ言

(協信社印行)

明ニ候ヘハ他日ノ言實ニ保存可致候
 商榷當初ヨリ今日ニ至ル迄ノ經過大略叙
 上ノ如クニ御座候而シテ村民ノ出訴ニ對
 シテハ弊社毫モ畏懼ノ念無之候ニ爰ニ其
 ノ來歴ニ就テ稽フルニ第一訴狀ノ行文夕
 ルヤ奉天交渉署長ヨリ屢次帝國總領事ニ
 致セル抗議書ノ字句ヲ其ノ儘用キタル箇
 所多々相見ヘ候ヘハ訴狀ノ裏面ニハ申迄
 モナク奉天官憲ハ存在ヲ認メ得ラレ候第
 ニ奉天官憲ハ弊社商榷地ヲ前清皇室ノ私
 産ト曲辯シ完膚ナキ迄ニ論破セラレタル
 為メ此ノ主張ヲ以テシテハ到底勝算ナシ

ト自覺シタルナルベク去リトテ官憲自身
 此ノ主張ヲ撤回スル譯ニモ参ラズシテ之
 ヲ不言ノ裏ニ葬リ別ニ村民ヲシテ民地ナ
 リトハ新ナル主張ヲ為サシムル次第ト揣
 摩セラレ候第三訴状中ニ誣罔讒構ヲ交ヘ
 アルハ遼中縣知事ノ意圖ヲ顯ハシ居ルモ
 一ト被存候第四出訴ハ民地トノ主張ヲ眼
 目トスルモ尚ホ若干地積ヲ皇室ノ私産ト
 シ三陵衙門ノ管理ト称シ候ハ三陵衙門ノ
 面目ヲ保存スル底意ヨリ来レルモノト推
 測セラレ候斯ノ如キ次第ニ候ハハ訴状ノ
 裏面ニハ奉天官憲三陵衙門ノ官人遼中縣

(縮倍紙印行)

知事及村民ノ四者存在セルハ明白ナル事
 實ニ有之換言スレハ四者共同ノ出訴ニ候
 去レハ愈々法廷ニ辯論ヲ聞ハスニ及ニテ
 ハ四者共同シテ如何ナル偽證ヲモ作製ス
 ルニ容易ナルベク前清時代ニ於ケル各衙
 門ノ印章等尚ホ保存セラレ居ルト聞及ヒ
 候ハ如何ナル官文書ヲモ製作スルニ容
 易ナルベク從テ如何ナル虚構ノ詐事モ
 事實トシテ露ハシ得ベキ便宜ヲ有シ候而
 シテ弊社ハ單ニ一個人ヲ以テ曩ニ既ニ民
 國官憲ニ展開シ舉示シタル証據ノミニ依
 リテ抗争スル外無之候ハ甚シキ不利ノ

地位ニ罷在候儀偏ニ御推察被下度候即弊社ハ帝國政府ノ積極的御庇護ニ頼ルノミニ御座候去レハ弊社ニシテ法廷ニ立タサルヲ得サルニ於テハ積極的御庇護トシテ豫メ左記諸件ノ御決行相成候様致度候

一、村民ノ暴挙ヲ煽動シ排日ノ妄動ヲ擅ニシ祖擊擬銃使用人逮捕等ノ事件ヲ續出セシメタル遼中縣知事及其ハ巡警長ノ罪ヲ鳴ラシ罷免方嚴ニ御交渉相成以テ帝國ノ勢威ヲ御發揚相成度候其ノ帝國勢威ノ發揚ハ弊社法廷ノ辯論及駁引ニ於テ絶大ノ御援護ニ御座候

(編信社印行)

二、商租地ハ外交的懸案ニ付セラレ未タ落着セサルニ横合ヨリ村民ノ公訴トナレルハ如何ナル次第ナルカラ詰問相成度且ツ民國官憲タル者其ノ職責上ヨリ前清皇室ノ私産ト主張シタルニ鑑ミ村民力之ニ違ヘル出訴ヲ為シタルニ對スル責任ノ自覺如何ヲ些ノ餘裕ヲ與ヘス追究相成度候右ハ弊社ニ賜ハル至大ノ御庇護ニ候

三、商租地ハ既ニ外交的懸案タルノ外又民事訴訟ノ係争地ト為レルニ就テハ其ノ地上ニ於ケル本年ノ收穫物ハ係争間日

支西國官憲ニ於テ保護シ弊社及村民ノ自由ニ委セス并ニ本係争間以後一切播種耕耘スヘカラサル旨此際至急ニ民間當路ノ官憲ヨリ村民ヘ命令相成様御嚴談相成度候

四。愈々法廷ニ於テ理非ヲ決スルノ場合ニ立至リ候節ハ日支會審ノ法廷タルコト勿論ノ義ト被存候慶民國ノ會審官憲ニ公平ノ見地ヲ求ムルコトハ本件ノ理勢上到底望ミ得ラレサルノミナラス自國民ノ利益ヲ絶對ニ企圖スヘキニ付會審ノ組織及ヒ會審官憲ノ心事ニ就テハ申

(協信社印行)

迄ノ義ニ無之候モ篤ト御詮議ヲ盡サレ以テ御庇護ヲ垂レサセラレ度候

右四箇條ハ法廷ニ立テ理非ヲ争フ上ニ於テ豫メ垂レサセラレタキ御庇護ニ候乍去督軍張作霖氏其ノ言明ノ如ク果シテ從來ノ交渉ヲ繼續シテ之ヲ解決セシ誠意アルニ於テハ法廷上ノ會審ヲ煩ハスマテモ無シト存シ候就テハ張氏ノ言明ヲ實トシ左ノ解決方法ヲ御提議相成度候

一。督軍張氏ハ鄭家屯事件ノ解決ヲ待テ其ノ後ニ於テ本件ヲ解決スヘシト言明相成タル趣ニ候慶元來本件ハ己ニ一年有

餘ノ懸案タルノミナラス鄭家屯事件ニ
何等關係ナキ事柄ナレハ此際急速ニ本
件ノ解決ニ向ツテ鋭進スヘキ様御嚴督
相成度事

(理由)表裏反覆ハ支那官憲最長ノ技倆
ニ候ヘハ張氏が鄭家屯事件ノ解決後
ニ於テセント言ヘルハ即亦曠日彌久
弊社ヲ疲勞セシメントスル計略ナル
ニハアラハルカ頗ル疑ハシク候若ク
ハ過般我カ總領事ヨリ彼ノ交渉署長
ニ對シ殆ト完膚ナキマテニ反駁ヲ加
ヘラレタルタメ此際之ヲ急追セラレ

(協信社印行)

ルニ於テハ屏息スルヨリ外ナキヲ思
ヒ言フ鄭家屯事件ニ托シ以テ之ヲ避
ケタルニハアラサルカ亦太夕疑ハシ
ク候故ニ此ノ際息ヲ繼カセス迅速御
究追被下候ハゴ解決ヲ容易ニスル所
以ト存候

一、督軍張氏ヨリ三陵衙門ニ命令シ談衙門
ヲシテ誠意ヲ披ラキ弊社ト協議セシム
ル様其ノ道ヲ開カレ度事

(理由)弊社カ商祖セル寺領ヲ皇室ノ私
産ト首唱シタルハ三陵衙門ニ有之然
ルニ理由モナク證據モナクシテ主張

相立タス去リトテ之ヲ撤回センハ衙
門ノ體面ニ関スルノミナラス或ハ罪
トモナルベキニ付其ノ内情ニハ悔悟
ノ色自ラ相見ハ曩ニ一タヒ弊社ニ情
ヲ通シ来リタルコトモ有之候併シ督
軍張氏ハ諛衙門ヲシテ直接弊社ニ交
渉セシムルヲ許サス監視ヲ加ヘ居ル
趣ニテ衙門ハ端々タル情形ニ有之候
若シ督軍ニシテ衙門ト弊社トノ直接
交渉ヲ誠意ヲ以テ許スニ於テハ弊社
ハ嘗テ衙門ト内議シタルコトモ有之
其ノ體面ヲモ立ワル成算ヲ有シ候ハ

(電信社印行)

ハ皇室私産ナリトノ問題ハ手モ逸ク
解決可致存候
右三陵衙門が窵ニ情ヲ通シ来リ及内
議ヲ試ミタルコトハ諛衙門ニ於テハ
絶對秘密ニ附シ居候
一督軍張氏ヨリ商租地各村ニ諭告シ總代
ヲシテ直接弊社ト意思ノ疏通ヲ圖ラシ
ムル様其ノ道ヲ開カレタキ事并ニ督軍
張氏ヨリ遼中縣知事等ヲ戒飭シ居民暴
挙ノ煽動ヲ為シ若クハ總代ノ自由意思
ヲ束縛スル等ノ言行ヲ為サシメサル事
(理由)商租地各村ノ理解カアル代表者

中ニハ抗争ノ故ナキヲ自認シ弊社ト
妥協ヲ試ントスル者尠カラサレモ毎
ニ地方官憲ノ抑制ニ遇ヒテ意ヲ果サ
ズ刺ヘ官憲ノ煽動ハ無知居民ノ暴舉
トマテ相成爲ニ心アル者モ其ノ群蠢
中ニ行動スルノ已ムナキニ至リ候次
第ニ付官憲ノ抑制除カレ煽動罷シテ
総代ノ自由行動ヲ許シ弊社ト意思疎
通ヲ試ムベキ旨徳通アルニ於テハ對
村民ノ解決ハ必シモ難事ニ與之候元
朱弊社ハ詳ニ村民各種ノ主張ヲモ聽
キ審ニ農村自治ノ舊慣ヲモ替ヘ而シ

(協信社印行)

テ商租地整理ノ最善ヲ期スル者ニ候
處誣罔讒構狙撃擬銃等九ユル妨害ニ
遭遇シテ未タ眞實ニ村民ニ接觸シ居
ラス候去レハ村民モ亦官憲ノ抑制煽
動或ハ爲ニスル者ノ恐嚇誑詐ニ遭遇
シテ未タ何等弊社ニ接觸シ居ラス候
故ニ村民ヨリ弊社ヲ被告トスル訴訟
ヲ提起シタル趣ナルモ彼等ハ訴訟ヲ
提起スルマテニ弊社ニ接觸シタル事
無之者ニ候後ツテ其ノ訴状ナルモノ
ヲ見ルニ多クハ見當違ノ事柄ニシテ
業々ニクハ箇條ニ書立テアレモ事實

ノ審査ヲ要スベキハ僅カ一ニケ條ニ
過キス其餘ハ詰合ヲスレハ容易ニ治
ルヘキ事柄ノミニ候斯ル次第ニ候ハ
ハ弊社トシテハ彼等ヲ法廷ニ累スマ
テモナク存候ニ付直接會合シテ相互
意思ノ疏通ヲ圖リタク存スル次第ニ
候

一督軍張氏ヨリ商租地各村ニ對シ本件係
争間收獲物全部或ハ日支西官憲ハ係
管ニ置キ尚係争間濫ニ播種耕耘ヲ為サ
シメズトノ旨命令アル様致度事
(理由)本件ニ就テハ已ニ陳述致候ヘハ

(協信社印行)

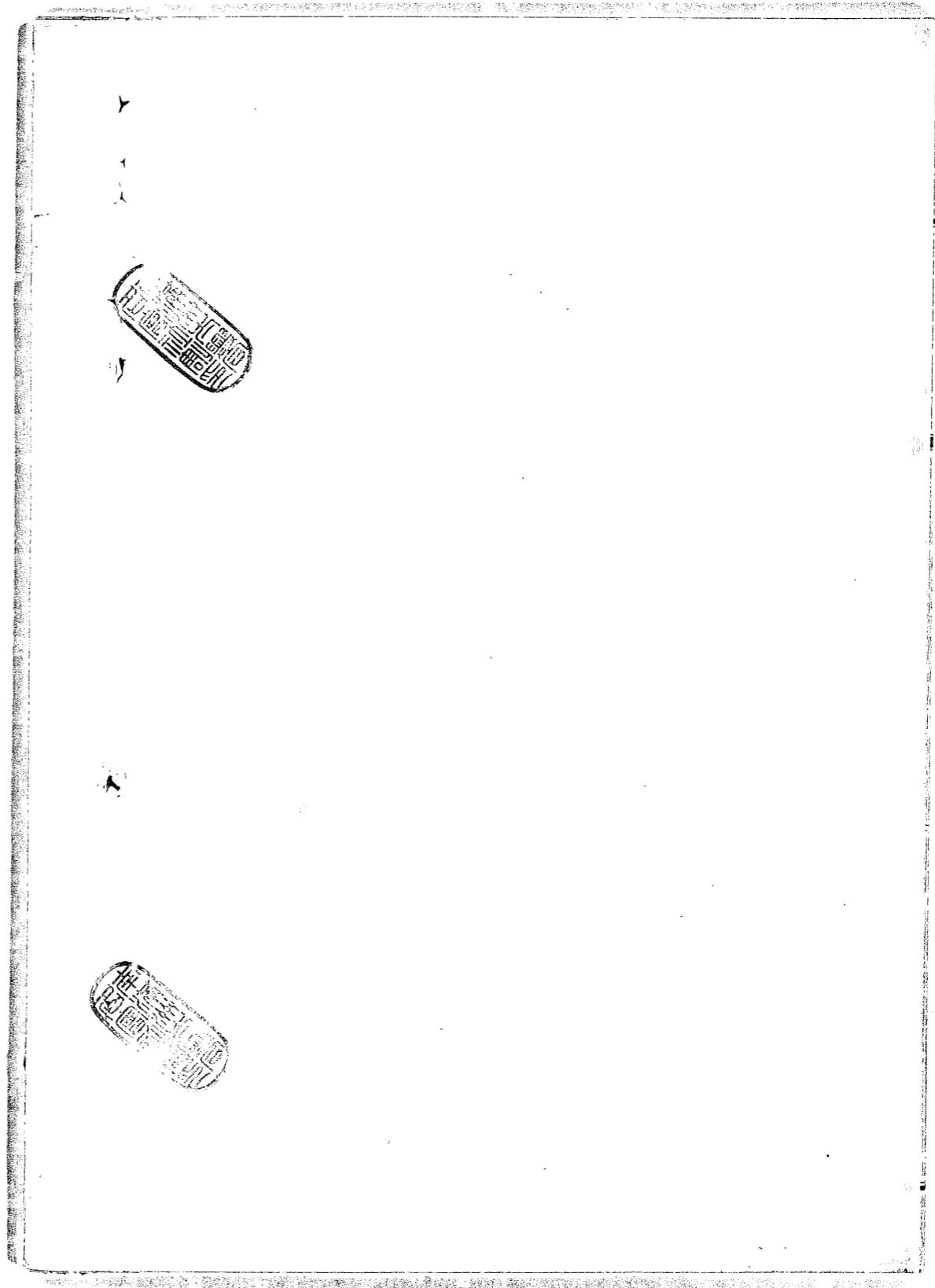
其ノ理由重テ不申述候要スルニ支那
側ニ在リテハ曠日彌久ヲ以テ弊社ヲ
苦ムル最良武器ト致居候ヘハ弊社ノ
立場トシテハ法廷ニ立ツニシテモ又
立タサルニシテモ本文ノ御取計ヲ是
非トモ願フ儀ニ御座候
以上稟請ノ事由如斯御座候何卒更ニ御賢
慮ノ上積極的御庇護ノ程恊願ノ至ニ耐ヘ
不候

大正五年九月 日

南滿洲太興合名會社社長

飯田延太郎





1-1906

029:

商租要紀

九二五
荷
森田

1-1906

0292

高租要紀目次

目次

| | |
|-----|-------------|
| 第一節 | 高租ノ由來 |
| 第二節 | 高租ノ土地 |
| 第三節 | 地冊 |
| 第四節 | 光緒新冊ノ鑑定及新契紙 |
| 第五節 | 圖記及村落ノ數 |
| 第六節 | 佃戶 |

1-1906

0293

高祖要紀

大正五年九月

南滿洲大興合名會社



第一節 高祖の由来

大正四年春夏、交民國奉天ノ勅建護國太平寺ノ住持穆本瑞トイヘル者叔父某ヲ以テ寺領整理ノ依頼ヲ齎ラシメテ云ヘテク願クハ有縁ノ慈力ニ倚リテ寺運ヲ傾セヨリ拯ヒ佛光ヲ闇黒ヨリ輝カシメタシト就テ其ノ太平寺ナルモノヲ觀ルニ堂宇頽敗シ墻垣壞歎シ僧餒エテカナク佛裸ニシテ靈モ亦泯ビタルニ庶幾ク光景坐口

Large empty table with multiple vertical columns, likely for a detailed record or ledger.

(協信社印行)

哀レヲ催サシメタリ僧ノ曰ハク寺素ト貧カラ
 ス香資ノ地遼中縣下ニ在ルモノ東西三十支里
 南北二十支里内ニ十八屯アリ土地肥沃ニシテ
 豊穰相續ケリト雖耕民誦ヲ讓レ跳梁自ラ肆マ
 ニシテ租ヲ納レス奸官汚吏又之ト相結ニテ租
 ヲ横奪シ己ヲ肥スノニ當テ一人ノ吾カ此ノ寺
 ヲ氣ノ毒ニ思フ者ナク遂ニ僧ノ懦弱ヲ侮リ詐
 結キテ誘出シ途ニ寺領典賣ノ證書ヲ擬造シ恫
 喝以テ署名捺印ヲ強要スルニ至リタリ僧僅ニ
 免レテ歸ルヲ得タルモ恟々自ラ安ニスル能ハ
 ス番資地ノ紅冊及ヒ圖記并ニ寺印等一タヒ彼
 等ノ強奪ニ遇ハ、萬事コ、ニ休スベキヲ恐レ

(協信社印行)

住持ノ身邊ニ置キ難キトコロヨリ竊ニ叔父ノ
 保管ト爲シ寢ヌルニモ動クニモ肌身ニ着ケテ
 守リ居ル窮狀ニ在リ希クハ偉力ノ扶持ニ頼リ
 テ蹇艱ヨリ脱シ地領ノ整理ニ倚リテ凍餒ヨリ
 免カレタシトノコトニ惻隱禁シ難ク天日未タ
 晦カラサルニ盡ンソ官ニ訴ヘテ奸官賊民ヲ懲
 ラスコトラ圖ラナルヤト一再ナラス之ヲ説キ
 訴訟代理人ニハ其道ノ人ヲ見立テ、紹介モス
 ヘク費用ハ代ツテ支辨モスベシトマテ言ヒテ
 勸奨シタレトモ否々彼等ハ當路ニ夤縁シ勢威
 ニ攀援スル者ナレハ僧ノ懦弱ト孤立トラ以テ
 訴訟沙汰ナド爲シ得ベキニアラスト云ヒ只偏

寺領ノ管理經營ヲ請フテ己マズ因ツテ此ニ
 之ヲ慮ルニ住持ノ委任ニ依リテ管理ヲ行ヒ經
 營ヲ立ツルハ名實共ニ住持ノ使用人タラサル
 可カラスシテ弊社ノ能クセサル所斯クテハ何
 等ノ勢威ナクシテ管理モ經營モ行ハル可キニ
 アラス若カス寺領ノ上ニ商租權ヲ確立シ而シ
 テ住持ノ請フ所ヲ充サンニハト是ラ商租ノ動
 機ト為ス
 商租ハ前述ノ動機ニ出テタリト虽モ弊社之ラ
 社ノ事業ト為スカラニハ徒ニ寺僧ニ對スル慈
 善ト義俠トノミラ以テ目的トスルヲ得ス乃亦
 營利ノ目的ヲ之ニ置キテ兩面ノ調和ヲ取ラサ

（福信社印行）

ル可カラス其ノ調和ノ成立ハ即商租契約ナリ。
 商租契約ニ於テ住持ノ要求希望ハ十カマテ
 之ヲ充タシアリ當時住持ノ年收ハ小洋銀五百
 元當時ノ銀相場ニヨリ換算スレハ僅々秋三百圓ニ過キスシテ其レモ寺領ノ租
 ラ横奪スル某衛門ノ官人ヨリ僅ニ救與ヲ受ク
 ルニアレバ危キコト限リナシ寺破レタリト雖
 勅建護國ノ格式ヲ有スルニ三百圓ヲ以テ争テ
 カ一年ヲ支ヘ得ヘキ凍餒瀕死誠ニ其ノ理ニシ
 テ此ノ三百圓カ年々必入ルトシテモ僧壽五十
 年間ニ得ラル、所虎万五千圓ニ過キサルニ搗
 テ加ヘテ其ノ住ヒスル堂宇ハ佛座ヲモ擧ケテ
 人ニ租與シアリタレハ租借者ニシテ之ニ居ラ

ント言ハバ僧ハ宿ルヘキ一枝ノ巢モナキ慘状
ニ在リタルナリ弊社ハ之ニ對シ其ノ請フ所ヲ
容レ殿堂修繕ノ費用及舊債銷却ノ資金并ニ生
活費等ヲ合ハテ商租料トシテ一時ニ之ヲ支出
シタル上爾後毎年寺領ヨリスル利益ヲ分給シ
テ香火養膳ノ用ニ充テシムルコトヲ誓ヒ之ヲ
契約書上ニ明訂シタリ
寺領地ノ廣袤面積ト其ノ肥沃ノ度トニ依リ年
穀秋收ヲ計算シ之ニ適應スル小作料ヲ徴収ス
ル打算ヨリセバ商租ノ價值タル頗ル大ニシテ
國民利便ノ發展ニ資スルニ足ルベキモ是只將
來ノ企圖ニ止マリ寺僧收入ノ現在ヨリスレバ

(協信社印行)

何等ノ價值モナキモノナリ然ルニ弊社が請フ
ガマハニ住持ノ求メヲ容レ現在ヲ露シ將來ヲ
富マスノ拳ニ出テタルハ住持ノ側ヨリ言ヘバ
其ノ寺領ノ改善及ヒ収益増加ノ最良唯一ノ方
法ヲ擇ヒ得タルモノニシテ弊社ヨリ言ヘハ由
緒アル寺院ノ七滅ヲ隣々一片義俠ノ意義ヲ存
シタルモノナリ住持及關係者カ蘇生ノ思何ヲ
以テ酬キレト云ヘタレハ必シモ彼等ノ諛辭ノ
ニハアラサルヘシ去レハ弊社ハ單ニ營利ノ
見地ニノミ居ルコトヲセズ寺院再興ヲ以テ殊
セ念トスル者ニシテ住持及其叔父等ガ因賊ヲ
以テ目セラレタルニ對シテハ飽マテ雪冤ノ拳

ニ出テントスル者ナリ

(一) 寺領ハ商租ノ目的物ト爲シ得ヘキヤ、(二) 住持ハ寺領ニ於ケル如何ナル權利者ナリヤ、(三) 民國法令ノ上ニ於ケル寺領ノ制度如何等ノ諸問題ハ有識ノ士ノ直ニ諒解セラレ、所ノモノナレハ爰ニ復タ之ヲ贅セス單ニ商租地ハ果シテ寺領タルニ相遠ナキヤノ一問ニ對シ住持ヨリ提供セル地冊圖記年ニ奉天ノ現在官廳ヨリ發給セル新契紙等ニ就キ尤記各節ニ分之ヲ説述セントス

第二節 商租ノ土地

(編信社印行)

| |
|---|
| 一 商租セル土地ノ地目及所在并ニ面積 |
| 地目 寺領ニシテ奉天城北ニ存在セル勅建護国太平寺ノ所領タリ普通ニ称シテ廟産ト云ヒ又香資地ト云フ |
| 所在 遼中縣ノ管下ニ在リ奉天ヲ距ルコト我カ八九里ノ西南ニ位置ス |
| 面積 東西三十支里南北二十支里即六百支方里ナリ其ノ一方里ハ通例五百四十畝ト計算セラル、ヲ以テ總計三十二萬四千畝アルベシ其ノ所謂一畝ハ我カ百八十坪ニ |

訣當スルヲ通例トスルヲ以テ
 面積五千八百三十二萬坪即約二
 萬町歩アルベキ筈ナリ然レモ是
 概念ニ過キス未タ精確ノ測定ヲ
 得サルヲ以テ果シテコレカケノ
 面積アルヤ否ヤ尚確信ヲ有セス
 且ツ一方里ニ含マル、畝數ナル
 モノ地方ニ依リ年代ニ因リ區々
 一定セズシテ大小廣狹ノ差アル
 ハ免レサル所ナルヲ以テ實例ノ
 結果縱令概念ヨリ著シク減少ス
 トモ弊社ハ勿論之ニ満足スヘシ

（協信社印行）

只四隣ノ居民が間隙ニ附入り寺
 領ヲ攘奪シ去ラントスルニ於テ
 ハ極力之ヲ防禦セサル可カラス

二、商租セル土地ノ疆界

商租地ノ疆界ニ就テハ太平寺所藏ノ圖記
 アト^ハ虽モ明確ナラサルヲ遺憾トス然レモ
 此ノ遺憾ハ我カ邦人が土地ニ関シテ有ス
 ル現在ノ省念上ヨリ觀テ遺憾トスルモノ
 ニシテ支那人ニ在ッテハ毫モ遺憾トスル
 所ニアラス何トナレハ古來支那ニ於テハ
 王府ノ地モ公侯ノ領モ旗人ノ土モ一般民
 地モ「四至」ヲ以テ東西南北ノ疆界ヲ表

示スルノミニシテ地圖ヲ以テ之ヲ表示ス
ルノ習慣ヲ有セサレハナリ所謂「四至」
トハ譬へハ「東ハ張姓ノ地ニ至リ西ハ李姓
ノ地ニ至リ北ハ道路ニ至リ南ハ河川ニ至
ル」等ト地冊或ハ地券ニ登載セラレタルヲ
稱ス此ノ「四至」ハ即チ其土地ニ於ケル權利
ノ疆界表示ニシテ公證公認ノ宛然ナル形
式ナレバ乃チ此ノ以上ニ地圖ナルモノヲ
添付スルノ觀念ナクシテ經過シ来レルモ
ノトス去レハ太平寺ヨリ引継キヲ受ケタ
ル地圖ノ明確ナラサルハ怪ムニ足ラスト
シ而シテ明確ナラストモ之ヲ藏置シ居タ

(協信社印行)

ルハ其ノ土地ニ對スル觀念ノ他ヨリ一步
超越セルヲ認ムベキナリ
高祖地ノ地圖ハ前述ノ如ク明確ナラサル
憾アレトモ所謂「四至」ハ乾隆ノ旧冊及ヒ光
緒ノ新冊ニ九箇村ヲ掲ケアレバ單ニ東西
南北ノ四點ノミヲ擧ケタル一畝ノモノト
ハ精確ノ度々異ニシ加フルニ東西三十里
南北二十里ト外郭ノ里程ヲ特記シ刺サヘ
其ノ以内ニハ居民畝畝ノ錯綜包擁等ナク
又毫モ関碍ナシトノ旨ヲ保證シアレハ右
ノ地冊タルヤ一般普通ノ地冊若クハ地券
ニ比シ遙ニ綿密ニシテ遙ニ明確ナルモノ

トス故ニ此ノ地冊ニ據リ疆界ヲ實測スルハ容易ニシテ商租地ノ四周ハ自ラ確定スヘク尚ホ其ノ測定ノ際ハ四隣居民ノ立會ヲモ求メ官憲ノ認定ヲモ請ヒ後來紛議ノ因ヲ除クニ努ムベシ只官民結托ニ排日ノ攀ニ出テ冥ヲ枉ケ虚ヲ構ヘ古來ノ寺領ヲ四邊ヨリ削奪セシ^延遇ハバ相互ノ證據ニ稽ヘ理非ヲ判ツテ多少ノ煩アルヲ免レサルヘシト豫期ス

第三節 地冊

遼中縣下ニ存在シ東西三十支里南北二十支里

(協信社印行)

ノ一疆域ヲ成セル土地ヲ弊社が太平寺々領ト確認セルハ該寺ノ所藏ニ係ル地冊ニ憑據シタルモノトス

一、地冊ノ數 太平寺所藏ノ地冊ニ新舊兩冊アリ舊ナルハ乾隆年間ノ作製ニ係リ新ナルハ今ヲ距ルコト二十數年ノ昔ナル光緒十八年ノ作製ニ係リ兩冊トモ每紙ニ官印ノ押捺アリ公冊トモ稱シ又紅冊トモ謂フ

二、地冊ノ性質 地冊ハ一種ノ土地臺帳ナリ而シテ古來ヨリノ格言ニ曰ハク冊ノ存在ハ即土地領有者ノ存在ヲ示スト是ヲ以テ其ノ土地ノ典賣ハ必該地冊ヲ典賣シテ留ム

ルコト莫ク其ノ土地ノ没収ハ必該地冊ヲ
 没収シテ遺スコト莫ク故ニ土地ノ典賣若
 クハ没収ノ事實カ以前ニ在リタリトスル
 モ地冊ニシテ当該本人ノ手ニ存在センカ
 之ヲ認定シテ以テ領有推者ト為ス者アル
 モ其ノ認定ヲ過失トスルヲ得ス是レ地冊
 ナルモノ、大體上ニ於ケル性質トス
 去レハ民国トナリテ以後地租増徴ノ目的
 ヲ以テ設ケラレタル清大局ノ如キモ王公
 ノ領地ヲ測定スルニ地冊ヲ以テ唯一ノ證
 憑ト為シ該地冊ニ包擁セラル、土地ハ居
 民ヨリ如何ナル故障苦情ノ申立テアリト

(協信社印行)

モ認メテ以テ王公ノ領有ト為シテ假借ス
 ル所ナレ
 地冊ハ王公若クハ旗人等ノ領地ヲ立証ス
 ルモノニシテ一般人民ノ土地ニハ地冊ナ
 ルモノハナク只地券ノミアリ換言スレハ一
 般人民ノ土地ニハ地券アリテ地冊ナク王
 公旗人ノ土地ニハ地冊アリテ地券ナキラ
 舊制トスト聞ク而シテ前清時代ニ於テハ
 地冊ノ土地ハ賣買ヲ許サザルヲ通則トセ
 リト云フ又王公ニハ地冊ノ正本ヲ所持セ
 シタルモ一般旗人ニハ副本ヲ所持セシ
 ルノミニシテ正本ハ旗人管轄ノ衙門ニテ

藏置セリト云フ要スルニ地冊ナルモノハ
土地領有ヲ証明スル最上ノ文書ニシテ皇
室ノ上諭若クハ最高ノ法令ニ由ルノ外改
変籍改^改シ得サルモノトス太平寺所藏ノ地
冊モ亦實ニ叙上ノ性質ト効カトテ儼存ス
ルモノナリ

三、乾隆ノ舊冊 本舊冊ハ管轄上司ノ查勘ニ
成レルモノニシテ定式ニ從ヒ官印ノ押捺
アリ而シテ此ノ冊ハ乾隆五十四年ニ招致
セル佃戸^{小作人}ト翌五十五年ニ招徠セル佃
戸ノ氏名及之ニ割當テタル荒地ノ畝數ヲ
列記シタルモノナリ去レハ冊ノ一部ノ残

(協信社印行)

存セルモノト見ルベク此ノ外ニ幾多ノ冊
ノ存在セシヲ疑ハス何トナレバ其以前ニ
於テモ又以後ニ於テモ幾回トナク植民シ
タリト信スヘキ理由他ニ存在スレハナリ
且ツ此ノ冊ノ上ノニニ於テ見ルモ其ノ植
民シタル場處ハ庄東トカ庄西トカ村ノ只
一方向ヲ指セルモノニテ村全體ニ植民シ
タルニアラサルコト明カニ見ラル例ハハ
甲村ノ東ト乙村ノ西ニハ此ノ年ニ植民シ
タルコト知ラルモ甲村ノ南ト乙村ノ北
ニハ何ノ年ニ植民シタルヤ此ノ冊ニテハ
分ラス孰レ此ノ年以前ニ植民シタルモア

ルヘク此ノ年以後ノ植民トナラタルモア
 ラン故ニ乾隆ノ舊冊ハ冊ノ一部ノ残存セ
 ルモノト見ルヘク寺領全体ノ冊トハ見得
 ラレス而モ此ノ冊據リテ知リ得ラル、ハ
 (一)當時寺領ハ皆荒地ナリシコト、(二)當時佃
 アハ皆太平寺ノ招致ニ係レルモノナルコ
 ト、(三)其寺領ハ東ハ土堡子ヨリ西ハ蔡伯
 街ニ至リ平安堡、太平莊、木耳崗、鬼兒
 坨、二道溝、各村ヲ包擁スルモノナルコ
 ト是ナリ此ノ三ツノ者ニ據リテ觀レハ寺
 領ノ起原ハ詳カナラサレトモ其ノ初ノ皆
 荒地ナリレヲ知ルヘク前後幾年ニ亘リ幾

(協信社印行)

田ニ植民サレタルカ詳カナラサレトモ皆
 太平寺ノ招致ニ係ルモノナルコトヲ知ル
 ヘク甬來村落ノ分合等ハアリタランモ今
 ノ寺領ハ古ノ寺領ニシテ廣袤相等シキヲ
 知ルヘシ
 本舊冊ノ膳本ハ三陵衛門前清皇室ニ存在ス
 ルハ寧社職員ノ親シク睹タル所ナリ三陵
 衛門ノ官人ハ此ノ膳本ヲ以テ正本ト了解
 シ冊ハ存在ハ土地領有者ノ存在ヲ示スト
 ノ信條ニ據リ太平寺々領ハ即三陵衛門ノ
 領有ニ三陵衛門ノ領有ハ即前清皇室ノ私
 産ト速了シ奉天交渉署長ヨリ帝國總領事

ニ對スル抗議トマテ為リタルが今ア其正
本ノ太平寺ニ存在スルヲ知りタル以上彼
等ハ其ノ主張ヲ撤回セサル可カラサル羽
目ニ在リ

四、光緒ノ新冊 本新冊ハ、太平寺ノ領有權ヲ
立證スル唯一ノ公文書ニシテ冊ハ初ニハ
寺領ヲ測量調査シタル官吏三名ノ職官氏
名ヲ列叙シ命令ニ依リ寺領ヲ倉助シタル
旨ヲ明記シ而シテ各村落毎ニ散在セル有
糧地耕作ノ佃戸氏名ヲ排列シ末ニ其ノ有
糧地存在ノ村落数并ニ有糧地ノ地畝及有
糧地耕作ノ佃戸数ヲ統計掲記シ古記舊圖

(協信社印行)

等ニ依リテ註明ヲ為シタル旨ヲ記シ東西
三十里南北二十里内ニ庶民ノ土地ノ混濁
ナキヲ證明シ差抜キノナラヌ様毎紙官印
ヲ押捺シタルモノナリ
本新冊ノ太平寺ニ存在セルコトハ三陵衙
門全ク之ヲ知ラサリシト云フ若シ彼ノ衙
門ニシテ夙ニ本新冊ノ存在ヲ知り及ビ該
衙門ノ所持セル乾隆ノ冊ガ覆本ニ過キス
シテ其ノ正本太平寺ニ在リト識ラハ皇室
ノ私産ナリトノ誤解ハ彼等自家ノ信條々
ル冊ノ所在ハ土地領有者ノ所在ヲ示スト
イフニ鑑ミ早ク釋去リタラシニ倉皇狼

復寺ノ住持ヲ皇産偷賣者ト誤想シタルコ
ソ住持ニ在ツテハ意料ノ外ナル冤罪ナレ
本新冊ニ就テハ猶ホ叙説スヘキコト多シ
ト雖モ暫ク之ヲ擱キ後節ニ速ブル所アラ
ン

五、新舊兩冊ノ異ル點 舊冊ハ乾隆五十四年
及五十五年ニ於ケル新募佃戸ヲ登録セル
モノ新冊ハ光緒十八年ニ於ケル現在佃戸
耕作ノ有粮地ヲ登録セルモノニシテ其ノ
登録ニ入りタル村落ノ數ハ九ヶ村ナリ是
レヲ當時ニ於ケル有粮地ノ全部トス
旧冊ニ於テハ新冊ノ金冢二道溝、前二道

(福信社印行)

溝、後二道溝、三村ヲ單ニ二道溝ナル一
名称ノ下ニ置キタルヲ以テ^即郷七ヶ村ナリ
新冊ニ於テハ之ヲ三村ニ分リテ登録セル
タメ即九ヶ村ナリ旧冊ハ以テ寺領ノ古ヲ
想定スヘク新冊ハ以テ旧冊トノ聯絡ヲ察
知スヘシ

第四節 光緒新冊ノ鑑定及新契紙

滿洲ニ於ケル土地ノ舊制ハ甚タ複雑ニシテ彼
ノ國人モ容易ニ窺測シ難シト称スル程ナレハ
弊社ニ於テ寺領高祖ノ際ハ種々ノ手段ヲ盡シ
テ考究シタル外土地制度ニ関スル専門的智識
ヲ有スル幾多ノ士人ニ就キ地冊ノ鑑定ヲ求メ

タルガ其ノ人々ノ意見ハ大ノ諸件ニ就キ絶テ一致セリ

一、地冊ノ真贋 何人モ一見直ニ真正ナリトノ鑑定ヲ與ヘ價作ナリトノ疑念ハ露ホドモ拙リ者ナカリシガ弊社ハ尚ホ念ヲ加ヘ寺ノ住持ニ對シ冊ノ紙尾ニ現在官廳ノ證明ヲ求メ来レト要請セリ住持及關係人ハ冊ハ土地領有ヲ立証スル最上ノ文書ナレハ之ニ官廳ノ証明ヲ加フル如キハ蛇足ヲ添ユレニ等シク却テ冊ノ尊嚴ヲ損スル恐アリ且ツ此ノ事ハ嘗テ聞キシコトナキ新例ヲホムル儀ナレハ官廳モ之ニ應スル

(協信社印行)

ニ躊躇スヘシ只茲ニ一事能クスベキモノアリ冊ハ上ニ記載サレタル有粮地ヲ新法ニ依リテ登録スルコト是ナリ此ノ登録ハ官廳ガ冊ニ信據シテ登録スルモノナレバ其ノ登録ヲ得ハ冊ハ明ニ該官廳ニ認めラレタルモノニシテ奥書証印ヲ得タルト同一ナレハ其ノ事ニ取計ヒ可申ト云ヒ去ツテ冊ヲ奉天財政廳ニ提示シ民国新契紙ナル官文書ヲ得来レリ弊社ハ是ニ於テ轉々冊ノ真正ヲ確知シ其ノ現在官廳ノ信據スル所ナルヲ親睹セリ

二、民國新契紙 是レ民国トナリテ以後新ニ

定メラレタル法令ニ據リテ發給セラルル、
 一種ノ地券ナリ本新契紙ヲ求メ得タル所
 以ハ前項記述ノ通りニシテ奉天財政廳ガ
 太平寺所藏光緒ノ新冊ニ掲ケアル有粮地
 ラ外科即登錄、謂ニシテ外科サレタル土地ハ國
 稅ヲ徵セラルルモノトスシタルモノナ
 リ
 本新契紙が光緒ノ冊ニ拠リタルモノナル
 コトハ新契紙ノ上ニ「粮冊地」ト明記サレタ
 ルニ因リテモ證明シ得ラルベク又住持ヲ
 稱シテ「業戸」又業主トモ謂
 フ地主ノ謂ナリト記載セルハ弊社ト
 シテハ土地制度ニ對シ新ナル一智識ヲ得
 タルモノトス元來弊社ハ民國ノ法令ニ據

(協信社印行)

リ住持ヲ以テ寺領ノ管理人トシ認メ居
 タルガ奉天官廳ハ寺領ニテモ外科サヘス
 レハ其外科地ハ住持ノ私有財産ニ移シ地
 目変更ヲ行フモノト知ラレタリ
 本新契紙ヲニ葉ニ造り平安堡村名ニ於テ
 参考ニ外科ヲ外科シ太平莊村名ニ於テ亦参考
 ナル内論ニ依リタル所以ハ奉天財政廳ノ親切
 ニ曰ハク冊ニ列挙セル「有粮之地」各項毎ニ
 新契紙ヲ發給スルトセハ其ノ數貳百幾十
 枚トナリ雷廳ノ手數夥シキノイナラス之
 ニ對スル太平寺ノ納費モ容易ナラサルベ

ケレハ一ニケ所ニ取纏メテ外科スル方可
ナラスヤ冊ノ立證ニ據レハ東西三十支里
南北二十支里渾テ是レ太平寺ノ舊地ナ
レハ何處ヲ外科スルモ同シ道理ニ付キ斯
クスルコソ便宜ナラノトアリタレハ住持
ハ乃今之ニ聽後ニ平安堡ト太平莊トハ寺
領ノ中央ニモアレハ旁ト此ノ二箇所ヲ指
定シテ外科ヲ請求シタルト云フ
斯カル次第ニテ光緒ヲ冊ヲ披閱スル者ハ
何人ト雖其ノ威嚴ヲ敬シ其ノ効力ヲ認ム
ルコト財政廳ノ意見ニ同シ去レハ該廳ノ
發給セル民田新契紙ハ冊ニ對スル公正ナ

(協信社印行)

ル意見ノ代表トモ称スヘキモノニシテ民
田官憲ハ總テ此ノ意見ニ一致スヘキモノ
ナルニ同シ督軍ノ下ニ在リ同シ省長ノ傍
ニ在ル交渉署長ガ之ヲ然ラストシ寺領ニ
アラス皇産ナリト云フハ不詮議モ亦甚シ
ト謂フヘシ尤モ交渉署長ノ言フ所ハ三陵
衙門ヨリノ申出ヲ輕卒ニモ取次キタルマ
テノ事ニシテ其ノ人自家ノ見地ニアラサ
ルコト明ナリ

三、有粮之地 光緒新冊、終リノ頁ニ「各項有
粮之地」ト記載アルハ取リモ直サス「本冊列
舉ノ各項ノ地畝ハ有粮之地ナリ」ト證明シ

タルモノナレハ冊上各村ニ區分サレタル
各佃戸氏名下ノ土地ハ孰レモ「有粮之地」ナ
ルコト言フマデモ莫シ冊ハ右各佃戸耕セ
ル「有粮之地」ヲ合計シテ五千九百七十四畝ト
セリ冊ハ又右有粮ノ地及ヒ有粮以外ノ地
ヲ合セテ東西三十支里南北二十支里渾テ
是レ寺領ト證明セリ
東西三十支里南北二十支里ノ寺領ニ於テ
五千九百七十四畝ヲ「有粮之地」トセハ其ノ
有粮地ハ全面積ノ五十分一ニ過キス其ノ
餘ノ大面積ハ何ニゾ若クハ所謂「浮多」ナル
モノカトノ疑問ニ接スルコトアリ因ツテ

(協信社印行)

先ヅ「浮多」ナルモノヲ説明シ續イテ寺領ノ
解釋ニ及ホサンニ支那ニ在リテハ大小ノ
差コソアレ王公ノ領モ旗人ノ有モ庶民ノ
土モ公称面積ノ外ニ隠レタル地畝ノ存セ
サル者莫ク一般ニ之ニ称シテ「浮多」ト云フ
浮多トハ隠レタル地畝ヲ意味スル古来ヨ
リノ実語ニシテ民国トナリ清大局ナル一
官廳ノ設ケラレタルモ王公等ノ領土ヨリ
其ノ隠レタル地畝ヲ吐出サシメ主旨ニ
外ナラス去レハ「浮多」ノ存在ハ民国上下官
民ノ均シク認ムル所ノモノニシテ買賣典
契何レモ公称面積ニ浮多ヲ合ハセテ行フ

ラ通則トス
 之ヲ太平寺ノ地冊ニ視ルニ東西三十支里
 南北二十支里ハ寺領トシテ冊上ニ公認セ
 ラシタルモノナシハ其相乘積六百方里ハ
 即公稱面積ニシテ隠レタル地畝ナルモノ
 無シ若シモ實測ノ結果東西一里ヲ加ヘ
 南北ニ二里ヲ加フル等ノコトアラハ其ノ
 加ワリタル土地ハ即隠レタル地畝ナレハ
 之ヲコソ「浮多」トハ称ス可ケレ正シク三十
 里二十里若クハ其以内ナルニ於テハ太平
 寺々領ニハ「浮多」ト称スヘキモノ無キナリ
 然ラハ全面積ノ五十分ノ一ニモ足ラサル

(徳信社印行)

小面積ヲ「有粮之地」ト限定セルハ如何
 寺院ノ舊制ニ通曉ストイヘル士人ノ説明
 ニ據レハ寺領ノ地冊ニ於テ「有粮之地」ト称
 スルハ國稅賦課地ノ謂ニアラス何トナレ
 ハ前清時代寺領ニハ國稅ノ賦課ナケレハ
 ナリ又成墾收穫地ノ謂ニモアラス何トナ
 レハ僅々タル地積ノシテ成墾トシ其ノ餘
 ノ大面積而モ實際菽粟豐穰ノ地ヲ未開墾
 地ト視ルベキ道理ナケレハナリ去レハ寺
 領ノ地冊ニ於テ「有粮之地」ト称スルハ納稅
 地ノ義ニモアラス成墾地ノ謂ニモアラス
 シテ別ニ意義アルコトヲ識ラサル可カラ

ス旧制ニ依ルニ勅建護国太平寺トイヘル
カ如キ格式アル寺ニハ夫々定マレル祭祀
ノ儀式アリテ一年ニ幾回ト擧式ノ日モ定
マリ居リ且ツ其ノ祭典ニハ如何様ノ裝飾
ヲ為シ如何様ノ供物ヲ捧グル等亦各々成
規アリテ中々八釜數キモノナリ此ノ祭祀
執行ハ寺トシテノ名譽ニシテ亦寺トシテ
ノ大ナル負擔タリ古キ時代ニ在リテハ朝
廷ヨリ之ニ要スル資料金ノ下賜アリタル
モ後ニ寺領地内ノ收入ヲ以テ寺自ラ辨ス
ルコト、ナリソレカ為ノ本来ノ領地數キ
寺院ニハ領地御加増ノ事ナドアリタリト

(協信社印行)

聞クモ太平寺ノ如キ大面積ヲ領有セル寺
院ニハ領地御加増ヲ要セザリシナラン何
トナレハ當初欽賜サレタル際ハ概シテ荒
蕪地ニテアリシナランモ次第ニ成墾シ收
入増加シ祭祀執行ノ資料乏シキヲ憂ヘテ
ル道理ナレハナリ然レモ祭祀執行ハ朝廷
ノ所命ニ依ルテフ主義ヲ改メラレタル次
第ニアラザレバ之ニ要スル資料金ノ出處
ヲ明確ニ定メ置カザル可カラズ然ラサレ
ハ終ニハ祭祀強制ノ威嚴ヲモ失墜スルニ
至リ譯ナレハナリ寺領内ニ於ケル有糧之
地ナルモノ即是ニシテ住持各ナリト雖其

ノ地ノ收入ヲ枉ケテ祭祀ヲ質素ニスルヲ容ナレス住持奢ナリト虽其ノ地ノ收入ヲ超エテ祭祀ヲ萃美ニスルニ及ハス去レハ「有粮之地」ハ朝廷所命ノ祭祀執行ノ料地ト視ハ意義ノ正鵠ヲ失ハスト謂フヘシ以上ハ寺制ニ明カナル士人ノ言ナルガ今之ヲ太平寺ノ地冊ニ觀ルニ其所領香資地東西三十支里南北二十支里ノ内有粮之地ハ五千九百七十四畝我カ三百五十町步餘ニシテ滿洲ニ在リテハ中農一象ノ産ニ過キスト虽所命ノ祭祀ハ其ノ地ノ收入ニヨリテ管ムラ得ベシ是レ只祭祀ノ料ニ過キサレ

(協信社印行)

ハ殿堂ノ修築衆僧ノ養膳其ノ他ノ經費ハ其ノ收入ヲ以テ支辨シ得ベクモアラズ即所謂「有粮之地」以外ニ大地積ノ寺領ヲ附與セラレアル所以帝識ヨリスルモ亦以テ諒解セラレルヘシ之ヲ要スルニ寺領ノ公称面積六百方里ノ内ニ祭祀料田五千九百七十四畝ノ特定アリト見ルベキモノナリ

四冊上ノ赤付箋 冊ハ「有粮之地」ヲ耕セル各佃戸ノ氏名及ヒ其ノ耕作畝数ヲ各項ニ分テ列記セルモノナルガ其ノ各項毎ニ赤紙ノ付箋貼付シヤリ此ノ付箋ハ現住持本端ノ父續朗ノ貼付シタルモノナリト云フモ

住持及関係人等逮捕命令ニ驚キ逃セシタ
 ルヲ以テ付箋ノ因由詳カニスルヲ得ス免
 ニ角冊ハ寺ノ互寶ニシテ假如暫時タリト
 モ他人ノ寺ニ委スヘキモノアラネバ付箋
 ハ寺身ハ調査ニ出テタリト見ル外ナシ此
 ノ付箋ハ光緒ノ新冊ヲ將ツテ原冊ニ較照
 シ若クハ現地ニ勘合シテ地畝ノ相違セル
 モノ又ハ原冊ニ存シテ新冊ニ漏レタルモ
 ノ若クハ新冊ニ掲記アルモ其ノ現地ノ下
 明ナルモノ等ヲ一々ニ調査シタルモノト
 ス其ノ所謂原冊ナルモノハ如何ナル冊ナ
 ルカ所在尋ネ難キモ新冊下賜以前ニ於ケ

(協信社印行)

ル「有粮之地」ノ冊ナルベント思ハル之ヲ要
 スルニ付箋ノ云々スル所ハ各佃戸耕作ノ
 「有粮之地」ニ對シ其ノ多寡差遠ヲ言ヘルモ
 ノニシテ寺領全体ノ面積ニ影響スルモノ
 ナラズ即有粮地ニシテ減スレハ以外ノ地
 ソレダケ増加シ有粮地ニシテ加ハラハ以
 外ノ地ソレダケ減少スト云フニ止ルノ
 寺僧ノ慾望ヨリスレハ有粮地ノ増加ハ願
 ハサル所タリシナラン何トナレハ有粮地
 ハ前ニ述ヘタル通り朝廷所命ノ祭祀執行
 ノ料田ニシテ其ノ増加ハソレダケノ奉祀
 ラ加重セラル、原因トナルベケレハナリ

當時付箋者ノ意思カ果シテ斯クアリシヤ
 否識レラ得ナルモ付箋ハ概シテ皆新冊有
 粮地ノ増加ヲ原冊ニ較照シテ訃ヘントス
 ル者ニ似タリ然レトモ冊ノ記載ハ公認ノ
 下賜ナリ付箋ハ公認ニ對スル私議ト見ル
 外ナケレハ當時ノ事情ハ免モ角トシ分ニ
 至リ付箋ヲ以テ冊ノ公認ヲ論議スヘキニ
 アラサルノコトナラス斯ノ如ク斯冊カ從來
 佃戶地藉ヲ商量スヘキ標準トシテ取扱ハ
 レタル事實ハ偶々以テ本冊ノ成立カ眞實
 ナリトノ有カナレ證跡ナリト思料ス

第五節 圖記及村落ノ数

(協信社印行)

前ニ述ベタル如ク支那ニテハ土地ノ疆界ヲ標
 表スルニ所謂「四至」ナルモノヲ以テスルノコトニ
 シテ地圖ヲ以テスル舊慣ナキニ因リ太平寺所
 藏ノ圖記ナルモノモ吾人現今ノ眼ヨリ視レハ
 勿論明確ノモノニアラス併シ其ノ之ヲ明確ナ
 ラズト云フハ官廳ノ認印モナク保証モナク之
 ヲ以テ領有權ヲ立証スルニハ証據カ甚タ乏シ
 キヲ以テ云フノニ然レモ實地ニ就キ疆界ヲ測
 算シ四隣住民ト立會ヒ其ノ所言ヲ聽ク場合ニ
 際シテハ寺藏ノ圖記ハ確カニ亦有カノ立會人
 ナリ何トナレハ此ノ圖記ハ疆界ニ對スル太平
 寺ノ主張アレハナリ

太平寺所藏ノ図記ニ葉アリ一ハ乾隆ノ旧園ト
称スル所ノモノハ光緒ノ新園ト称スル所ノモ
ノナリ

一、乾隆ノ舊園

頗ル舊式ノ繪園ニシテ家屋
ヲ示スニ屋壁ヲ以テシ槁梁ヲ示スニ梁脚
ヲ以テシ樹木ヲ示スニ幹枝ヲ以テスルナ
ド一種古朴ノ山水画ニ似タリ上ニ題辭ア
リ謹シテ太平寺香資ノ地畝坐落四至ヲ勘
得スト書キ起シ謹シテ憲鑒ニ呈スト書キ
收メ而シテ大清乾隆四十三年四月二十四
日ト記シアリ太平寺住持ノ叔父某が住持
ト共ニ本園ヲ弊社ニ提供セル際其ノ言フ

(德信社印行)

所ニ依レハ本園ハ當時寺領ヲ勘得シタル
官人ヨリ清廷ニ報告シタル図記ノ寫ニシ
テ清廷ニハ其ノ正圖保存セラレアル筈ナ
リ即チ本園ハ寫ニハアレド清廷ノ正圖ト
勘合シ得ラル、モノナレハ寺ノ至寶トシ
テ珍藏セルモノナリト
本園ニハ十八ノ村落繪カレ題辭ニ東西約
三十里アリ南北ニ十里アリテ等シカラス
其ノ間阡陌縱横シ該寺地改ハ居民畝畝ト
毗連セストアリ住持ハ本園全体即是寺領
ニシテ十八箇村ハ皆寺領ノ佃戸ナリト言
明セリ今此ノ園ヲ將ツテ乾隆ノ舊冊ト較

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------------|--------|-----|-----|-----|-----|-------|-----|-----|------------------------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-----------|------|------|------|------|-------|-------|
| 照スルニ冊ニ掲ケラレタル村名ハ左ノ七 | ケ村ニ過キス | 平安堡 | 土堡子 | 蔡伯街 | 太平莊 | 木耳朵崗子 | 兔兒坨 | 二道溝 | <small>金家二道溝、前二道溝、後二道溝ヲ概称ス</small> | 右ノ内二道溝ハ註記三村ヲ概括シタル称 | 呼ナリト信スヘキ理由アレバ之ヲ三村ト | シテ数フル時ハ冊上ニ見エル部落名ハ九 | ケ村タリ然ルニ因ニハ右九ケ村ノ外ニ左 | ノ九ケ村ノ繪示アリ | 曹家窩棚 | 張家窩棚 | 匡家窩棚 | 丁家窩棚 | 小費家窩棚 | 大費家窩棚 |
|--------------------|--------|-----|-----|-----|-----|-------|-----|-----|------------------------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-----------|------|------|------|------|-------|-------|

(協信社印行)

蘇家庵 八砂堡

即乾隆舊冊ノ記載村名ハ九箇ニシテ當時ニ於ケル舊圖ノ繪示ハ十八ケ村ナリ然レトモ其ノ不符合ハ竟モ怪クニ足ルモノ莫シ何トナレハ因ハ寺領ノ全域ヲ画ケルモノ冊ハ二ケ年間ノ小作人招致ヲ誌セルモノナレバナリ

二寺領ノ起原 太平寺創建ハ何帝ノ治世ニ在リシヤ又其ノ土地ハ如何ナル事ヨリ寺領トナレリヤ往持及其ノ叔父某等ハソレ等ノ記録ヲ整頓シテ提供スヘシト約シタルモ逮捕ヲ逃レ行衛不明トナリシニ由リ



今に至り之ヲ得ラレサルハ遺憾トスル所ナルモ三陵衙門ノ官人及奉天交陟署長ノ言フ所ニ從ヒ弊社モ亦前清ノ昔時欽賜サレタル土地ナリト信セリトス但シ其ノ年代ハ未タ之ヲ詳ニスルヲ得サルモ乾隆ノ初年カ若クハ尚ホ其ノ以前ナルヘシト推想セラレ乾隆四十三年ニハ既ニ幾多ノ植民アリタルヲ信セスンハアラス縦令数戸ノ小村ナリトモ当年作製ノ図ナリト云ヘルモノニ已ニ十八ヶ村ノ配置画カレアレハナリ故ニ其ノ当時之ニ對スル全体ノ地冊アリタルハ疑フ可クモアラネド今トナ

(編信社印行)

リテハ其ノ所在分明ナラスシテ只僅クソレヨリ十餘年ノ星霜ヲ経タル乾隆五十四年ノ小作招致及翌五十五年ノ小作招徠ヲ記セル地冊ヲ遺セルノミ

三、光緒ノ新圖 住持及其ノ叔父ノ言ヘル所ニ據レハ光緒新冊ノ下賜アリタル當時倉勤ノ官憲ハ寺領園ヲ作製シ朝廷ニ奉呈シタル筈ナレハ其ノ正園ハ必何處ニカ存在シアルヘシトノコトナリ而シテ其ノ園ノ馮ナリトテ示セルモノヲ見ルニ乾隆ノ旧園ノ古朴ナルニ似スシテ頗ル今世風ノ作園ナリ題辭ハ舊園ト同シク謹シテ勤得ス

ト冒頭シ敬ニテ憲鑒ニ呈スト結收シアリ
其ノ東西及南北ノ相距ハ舊圖ト同シノ三
十里二十里ニシテ十八ヶ村ノ位置及ヒ全
領域ノ「四至」等太々明瞭ナリ

四、國記ノ價值 乾隆光緒ノ新旧兩國ハ前ニ

モ言ヘルカ如ク官憲ヨリ其ノ筋ニ呈出セ
ル國ノ寫ニ過キスレテ當時ニ於ケル官憲
ノ印章ナキモノナレハ疆界主張ノ立証ニ
ハ効力頗ル乏シキヲ遺憾トスルモ右兩國
ニ謂フ所ノ東西三十支里南北二十支里ハ
官印ノ立証アル光緒新冊ト一致シ互ニ相
透ハス即兩國ハ新冊ノ立証ト相待ツテ実

(協信社印行)

地測定ノ憑據トアルベキモノナリ要スル
ニ兩國ハ疆域ニ對スル太平寺ノ主張ニ外
ナラザレハ四隣居民ノ主張ト并ハセ誓へ
以テ東西南北ノ界線ヲ劃スベキナリ

第六節 佃戶

以上各節所説ノ如ク太平寺々領ハ東西三十支
里南北二十支里ト定リ動カスニ由ナキモノナ
リ然レハ弊社ハ東西ニ一直線ヲ劃シ南北ニ亦
一直線ヲ劃セル正シキ長方形ノ土地トハ必シ
モ信スルモノニアラスシテ岡阜河川沼澤等天
然ノ地形ニ依リ突出ノ部分モアルヘク亦彎入

ノ處モアルヘシト思惟スルモノナリ其ノ境界
 線ハ追ッテ定マルモノトシト兎ニモ角ニモ其
 ノ線内ニ播種耕耘スル者ハ寺領ノ佃戸ニ相遠
 ナク異議ヲ容ル、餘地ヲキモノナリ所謂佃戸
 トハ我田ノ所謂小作人ナリ
 佃戸ニモ幾多ノ歴史アラシク(一)寺領起原ノ古ヨ
 リ子孫継承シテ今ニ至レル佃戸モアル可ク、
 (二)遙カニ後レテ植民サレタル佃戸モアルヘク、
 (三)金カニ由リ佃戸ノ權利ヲ占領シタル佃戸モ
 アルヘク、(四)威力暴壓ニ由リ舊戸ヲ逐斥シタ
 ル佃戸モアルベク、其ノ他質入抵當買賣讓與
 ニ由レル種々雑多ノ末歴アル可シト雖弊社ハ

(協信社印行)

絶テ之ヲ認メテ小作権ノ變遷ニ過キストスル
 者ナリ更ニ聞ク所ニ據レハ寺領内各村間ニハ
 幾ツヒカ耕地攘奪ノ争アリテ強村ハ弱村ヲ攻
 畧シテ其ノ耕地ヲ占領セリト云フモ弊社ハ亦
 之ヲ認メテ小作権ノ争奪ニ過キストスル者ナ
 リ
 斯カル歴史ニ因リ植民當初太平寺ヨリ戸毎ニ
 割当テタル耕地ハ威力ニ由レル兼併吞噬ト金
 カニ由レル買収差抑等ニヨリ大佃戸ト小佃戸
 ニ分レ大佃戸ハ自ラ地主ト称シテ勢威ヲ張リ
 小佃戸ハ大佃戸ニ対スル小作人ノ地位ニ落ケ
 テ之ニ佃組ヲ納ムルニ至レリト云フモ弊社ハ

各村ノ自治ヲ重ンジ大佃戸ト小佃戸トノ旧来
 ノ關係ヲ成ル可ク認ントスル者ナリ
 今ヤ大多数ノ小佃戸ハ小數ノ大佃戸ニ餘儀ナ
 シサレテ頗ル過重ノ佃租ヲ課セラレワ、アレ
 ハ若シモ弊社ガ商租ノ真相ヲ普ク熟知セシメ
 大佃戸ガ中間ニ在リテ租ヲ私スルノ事由ナキ
 ラ説得シ我カ社直接納租スル者ハ徒来ノ租額
 ヲ半減ストノ公約ヲ明示シ以テ群衆心理ヲ煽
 起シ且ソ底護レ且ツ鼓勵スルニ於テハ大多数
 者ノ向フ所大佃アラ風靡遂斥スルニ難カラズ
 ト雖モ弊社ハ成ル可ク現状ヲ破壊セザルヲ旨
 トシ飽マテ穩健ナルヲ志トスル者ナレハ未タ

(協信社印行)

嘗テ之カ敢行ヲ試ミタルコトナク隱忍以テ大
 佃戸ト閑襟熟議ノ機會ヲ造ルニ努ムルノニ
 然レモ彼等大佃戸ハ奉天及地官憲ノ蔭ニ匿
 シテ弊社ニ接近スルヲ懼レ一面ニハ官憲ノ煽
 動ヲ藉リテ小佃戸ノ暴舉ヲ操ツリ之ニ頼リテ
 氣勢ヲ示スノシニシテ弊社ノ商租ニ對シテ何
 ガ不平テ何が若情ナルカラテ語リシコト無ク徒
 ラニ弊社ヲ誣罔シテ民屋ヲ撤去スル企圖アリ
 トカ墳墓ヲ發掘スル意思アリトカイヒテ空ヲ
 騒キヲ為スノ去レハ彼等ノ主張ノ如何ナル
 モノナルカハ未タ聞クヲ得ナル所ナルモ最近
 彼等ガ提出シタリト称スル訴狀ナルモノヲ見

ルニ其主張ハ大略凡ノ如クニ想像セラル

其一、太平寺ノ寺領ナルモノ一坪モテク只皇
室ノ私産四百二日
トハ又天地トモ云フ一田地ハ十畝ナルヲ普通
トスルモ六畝ナルモアリ去レハ四百二日ハ
四百拾畝乃至
四十畝拾畝トス

其二、右四百二日ノ皇産ハ十一ヶ村ニ散在シ
住民ノ耕ス所ニ係リ而シテ其ノ租ハ之ヲ
三陵衙門ニ納ム其ノ耕民ニハ名冊アワテ
存ス

其三、十八ヶ村ノ皇産以外ノ地ハ或ハ王府ノ
領タリ或ハ官衙ノ附屬地タリ或ハ莊田タ
リ或ハ升科地タリ或ハ紅冊ノ餘地タリ故
ニ太平寺ノ領地ナルモノ一坪モナシ

(協信社印行)

入ヲ盲ニスルモ程コソアレ笑止サニ堪ヘサル

次第ナレド是レガ幾多官憲ノ其ノ裏面ニ存在
スル訃状カト思ヘバ軽々ニ看過レ得ラル、仕
宜ナラネバ弊社ノ所見ヲ將ツテ之ニ註釋ヲ加
ヘシニ

第一、皇産四百二日
ト云ヘルハ太平寺所藏
乾隆ノ舊冊ト地積ダケハ一致セル所アリ
該舊冊ニハ佃アニ配当セル各項ノ荒地ヲ
合計シテ貳千四百畝ト記シアレハ六畝ヲ
以テ一日ト計算スルトキハ四百日トナリ
計數ダケハ正ニ相符合ス其ノ之ヲ皇産ト
思ヘルハ全ク三陵衙門ノ誤ニ出ラ他ニ根

據アルエアラハレコト第三節第三項ニ述
ベタル如シ

第二、皇産ヲ耕セル住民ノ名冊 ト云ヘルハ

三陵衙門ノ睿テ發給セル照根或ハ存根ノ
謂ナルベシ該衙門ハ太平寺ニ乾隆及光緒
ノ正冊アルヲ識ラス迂濶ニモ衙門ニ存在
セル乾隆ノ副冊ヲ以テ寺領ヲ皇産ト誤解
シタルコト第三節ニ於テ已ニ述ベタル通
ナルガ此ノ誤解ハ不幸ニモ冥地ニ行使セ
ラレタルタメ轉々寺領ノ佃アラシテ太平
寺ニ負クニ至ラレメタリ其レハ民国二三
年ノ交ニ在レハホシノ近頃ノ事ニシテ該

（福信社印行）

衙門ハ寺領内ノ各村ニ照根存根ト名ツケ
タル印刷文書ヲ頒布シ太平寺香資地ハ應
ニ皇産タルベシト令シ爾今以後本衙門ニ
納租スヘシト命シ其ノ地ヲ耕作スル人民
ヲシテ地段、四至、畝數、浮多等ヲ誤書
ニ記入届出ヲ為サンメタリ乾隆及光緒ノ
公冊ニ於テ明ニ太平寺香資地ト定メアル
寺領ニ對シ斯カル妄擧ヲ敢テシタル三陵
衙門ハ縱令設解ニ出テタルニモセヨ其ノ
罪決シテ連ルベキニアラズ去レト何モ知
ラサル人民ガ之ニ據リテ其ノ地ヲ皇産ニ
編入セラレタルモノト思惟シタルハサモ

アルベキ事ニシテ彼等届出ノ畝数ハ思フ
ニ合計四百二日ナルヘク又名冊ト云フハ
三陵衙門ノ發給セル照根ノ謂ナルヘシ
第三右皇産十一ヶ村ニ散在ス ト云ヘルハ偶
以テ寺領ガ十一ヶ村ニ跨レルコトヲ住民
任意ニ自白シタルモノナレドモ太平寺ノ
主張ハ十八ヶ村ニシテ高ホセケ村ノ相遠
アリ然レトモ住民ハ一面ニ十八ヶ村ヲ攀
ケテ寺領ニアラスト争フモノナレハ其ノ
争フ所ニ真ノ事实在スベク東西三十里
南北二十里ノ内ニハ事實上十八ヶ村ノ存
在アレハ事實上ノ解決ニ委スヘキナリ元

（信託社印）

未寺領ヲ皇産ト為セルハ三陵衙門ノ誤解
ニ出テ其ノ誤解ハ乾隆ノ副冊カ該衙門ニ
存在セシニ因由スルコト明カナレハ彼等
ノ所謂皇産ハ九ヶ村ノ上ニ存在スト主張
スヘキ筈ノモノナリ何トナレハ乾隆ノ冊
ニハ九ヶ村ノ記載アリテ其ノ荒地合計
四百日六畝ヲ日
ト計算シナレハナリ然レハ乾隆ノ冊
ハ前ニモ速ベタル如ク五十四五十五年
間ノ植民ヲ登載セルモノニテ冊ノ一部ト
見ラルヘキモノナレハ必シモ之ニ抱泥ス
ルニ及ハス寺領十八ヶ村ニ散在スト云フ
モ亦妨ケス

三渡街内之
 シ争ヲト可
 ナリ真ノ王
 者ノ科ヲ係
 リテ弊社之
 ヲ守認ト主
 張スルヲ
 シテハ

第四 紅冊餘地及升科地 真ノ皇産ヲ称シテ弊
 社之ヲ寺領ト主張スルニ對シテハ王府之
 ヲ争フコト可ナク官衙附屬ノ土地果シテ
 存在シ莊田亦果シテ有ルナラハ共ニ各争
 フヘキ帝詔資格者アルベシ弊社ハ奉天交
 渉署長ノ要求ニ聽キ我カ統領事ニ頼リテ
 夙ニ商租契約書ノ寫ヲ該署長ニ提出シタ
 レハ弊社ガ寺領ト主張スル所ノモノハ十
 有八々村ヲ包有聯結セル土地ナルコトハ
 該署長モ三渡街門モ疾クニ熟知ノ事ナリ
 トス而シテ其ノ抗議ハトイヘハ弊社ノ商
 租地ヲ擧ゲテ總テ皇室ノ私産ト主張シタ
 (協信社印行)

ルノニニシテ末夕嘗テ一毫モ他ノ地目ノ
 存在ヲ主張シタルコト無シ一年有餘ノ久
 シキ幾回トナク同一抗議ヲ繰返シタル末
 ニ於テ人民ヨリ突如皇産ハ僅ニ四百二日
 ノニニシテ他ニ種々ノ地目存在ストノ主
 張ニ遭遇セルハ官憲トシテ如何ニ之ニ對
 スベキカ抑人民ノ此ノ主張タルヤ弊社ニ
 對スル反抗ノミナラス責任アル官憲ノ主
 張ニ對スル反抗ナルヲ奈何スヘキヤ人民
 ノ反抗是ナラハ官憲徒來ノ主張タル其ノ
 責任ノ歸着ナルヘカラス官憲徒來ノ主
 張是ナラハ人民ノ主張ハ虛偽ノ出訴ナラ

サル可カラス二者必其一ニ居ラシモ暫ク
 官憲徒来ノ主張ヲ無キモノトシ新ニ人民
 ノ主張ヲ迎ヘ聴カシニ人民トシテ弊社ニ
 対シ抗争ノ資格アル地目ハ紅冊餘地及升
 料地ノ外ナカルヘキナリ
 彼等ノ所謂紅冊ノ餘地トハ紅冊上ニ公認
 公称サレタル面積以外ノ餘地即隱レタル
 地畝ヲ云フモノナルベシ普通ノ地冊或ハ
 地券等ニテ單ニ「四至」ト「畝数」トノニ公認サ
 レタルモノナラバ兎ニ角太平寺紅冊ノ如
 キ東西幾里南北幾里ト其ノ面積ヲ公認サ
 ルタルモノハ隱レタル地畝即「浮多」ハ存

(備信社印行)

在セサルナク 第四即第三項ニ詳述セル所考者
 彼等ノ所謂升料地ニ至ツテハ弊社モ亦其
 ノ事アルヲ豫期シ居民ニ其レ相應ノ言分
 アルベシト想像スル者ナレバ審ニ升料ノ
 事實真相ヲ觀ント希フコト切ナリ去レド
 必シモ一概ニ之ヲ排斥スルノ念ヲ有セヌ
 ト雖元来ノ制度法令ヨリスレハ紅冊ニ於
 テ寺領ト定マレル土地ハ其ノ紅冊ノ所有
 主ナル在持ノ外升料請求ノ權利ナキ者ニ
 シテ在持ナラサル者ノ請求ニ成レル升料
 ハ假知官廳ヨリ其ノ執照ヲ與ヘタルニモ
 セヨ絶テ無効タルヘキモノナク何トナレ

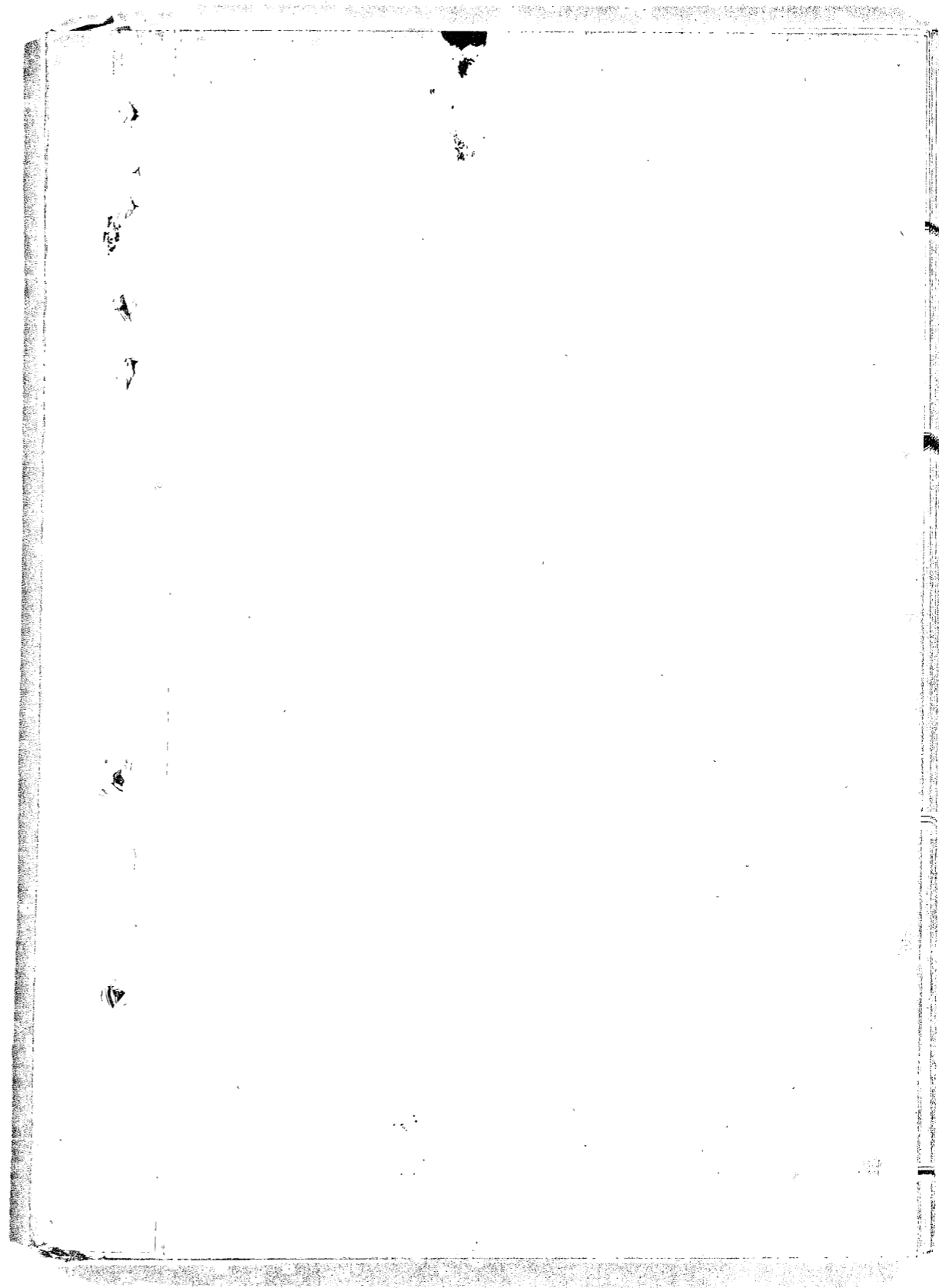
ハ所有権ナキ者ガ他人ノ所有権ニ属スル
土地ヲ已レノ物ト詐称シテ登記ヲ受ケタ
ルト同一ナレハナリ去レハ斯ノ如キ誤レ
ル事實ハ絶対ニ存在スヘキ筈ノモノナラ
ネド支那ニ在リテハ随分有勝ノ事ニシテ
殊ニ太平寺々領ノ如キ官民結托シテ横奪
ノ宿望ヲ包藏セル事實影然タルモノニ在
リテハ横奪手段トシテ升科ヲ行ヘル土地
恐クハ二三ニ止マラサルベシ其ノ当該悪
意者ニ對シテハ假借ノ限ニアラザルモ悪
意ノ結果ト知ル由モナク單ニ升科執照ヲ
觀テ之ヲ抵当ニ取り若クハ之ヲ買求メテ

(協信社印行)

地主ト自信セル者ハ其ノ情状眞ニ酌ムヘ
キモノアリ是レ弊社ガ升科ノ真相事實ヲ
審ニシ然ル後適當ノ整理ヲ行ハントスル
所以ナリ

之ヲ要スルニ弊社ハ農村ノ現状ヲ壞ラス舊慣
ヲ害セス自治ヲ傷ケス主張アル者ヨリハ其ノ
主張ヲモ聽クヘク事由アルモノニヨリハ其ノ
事由ヲモ聞クベク佃戸ハ佃戸トシテ之ヲ遇シ
以テ太平寺ノ要求ヲモ充タシ亦弊社ノ事業ヲ
モ確立セントスル者ナリ

高租要紀終



1-1906

0328

寫

外務省第二二五号

大正五年十二月八日

在奉天

総領事代理 矢田七六郎

外務大臣古田博士子爵本野一郎殿

土地高租ニ関シ支那官憲ノ意嚮

報告ノ件

大平寺々領高租寺従来各地ニ發生セル土地高租
問題ノ多クハ南滿洲ニ在ケル土地制度ノ不備ナルニ
一攪テ金ノ累利ヲ得ントスル不真面ナル事業ミテ
事毎ニ支那官民ノ及抗ヲ買ヒ邦人ノ健全ナル發展

外務省

上面白カラセルモノアル次第ハ今年十月七日附俄省公
第一九一号拙信ヲ以テ及所報告置候至ニ有ニ候
然ルニ従来張督軍ハ本官ニ對シ自分等ハ一律日本
人ノ高租ヲ排斥セントスルモノニハ決シテ無之正當ナル手
統ニヨリ相當ノ地價ヲ以テ高租セントスルモノニ對シテハ
便宜ノ供出ヲ惜マサル旨譯及シ聲明致候候至最
近南滿洲鐵道會社ニ於テ鞍山站製鐵所設置ニ
必要ナル立山站驛近傍ノ土地ニ百万余坪ヲ買入ニ就
直接張作霖ニ事情ヲ兩凍シテ申入レタルニ之ヲ快
諾シタル趣ニテ境界標木モ數日前無事建設ヲ
終ワシテ農民ノ及抗ヲ見ルコト無之カリシ由ニ有之又今
般南滿洲製糖株式會社ニ於テモ右滿鉄ト同標ノ希
望ヲ申入レタル如ク張督軍ハ場所並ニ般別寺ヲ決意

指示スルニ於テハ相当ノ援助ヲ辞セサル旨回答シタル
趣ニテ目下内滿ニ交渉進行中ニ有之前記張作霖
ノ言明モ内勝一片ノ辞令ニ過キサルモノトハ認メ難ク
次第ニ有之也

要スルニ従来ノ實例ノ如キ當地方日支人間ニモ余リ信
用ヲ有セサル本邦人ノ古証書ヲ探シ出し之ヲ慶細ノ
價格ニテ買入レ証書名義人ト商租契約ヲ締結シ
其成立ヲ主張シテ種々悪辣手段ヲ弄シ實際土地
方農民ノ經濟状態ヲ激変セシメントスルモノニ對シテハ
支那信託局モ極力成立ヲ妨ケントスル意趣尙ナルハ逐
次報告ノ通ニ有之候得共相當ノ地價ヲ投シテ着
實ニ經營セントスルカ如キ確実ナル事業ノ商租点モ
排斥セントスルモノニハ無之キモノト被思料矣從テ瀋

外務省

名手カ常ニ主張スルカ如ク太平寺々領商租問題
ニ付日本官憲ニ在テ充分援助ヲ請フテ有利ニ解決
セザレハ南滿洲ニ於ケル一般商租ヲ阻害スハシトノ意
見ハ托曼ニ過クルモノナルノミナラス斯ノ如キ援助ハ寧ろ
却テ真面目ナル事業ノ商租ヲ阻害スル虞アルヲトモ
被思料矣右序参考迄此段及序外告外敬具

本信馬送付先北京林公使

太平寺廟地高租ニ関シ支那側抗議ノ論據
及之ニ對スル會社側ノ駁論

支那側ノ抗議ハ多少矛盾ナキニ非サレトモ左ニ
列記ス

(一) 護國太平寺ハ前清時代ニ勅建ノ寺院ニテ昭
陵官田ヲ賜與シ其ノ官租ヲ菲薄^{該寺}香華ノ
資ト爲セリ然レトモ只受租ノ利益ヲ有スルノ

ミニシテ處分スルノ權限ナシ

(二) 前年前清皇室財産整理ヲナシ三陵衙門
(皇室私産管理廳)ヨリ各小作人ニ地券(借
地証)ヲ發給シ各小作人ヲシテ之ヲ領有セシメ以
テ權利保全ヲナシタル事實アルノミナラス乾隆
五十四年ノ地冊(土地台帳)及毎年總管
^{關防}衙門ニ於テ人ヲ派シテ行ヘル借地料ヲ徵收ノ
控書(割印ヲ施セルモノ)モ三陵衙門ニ保管

シアリ之皆該廟地カ皇室ノ私産ニ屬スルノ証
ニシテ該地ヨリ歷年納ル糧賦ハ仍ホ昭陵派
員ノ徵收スル所タリ

(三)三陵衙門發給ノ照根(文書ノ名ニシテ地券ノ
コトカ)ニ勅建議國太平寺官地ト記載アル皇
室財産ノ証據ナリ

(四)太平寺此ノ項ノ地租ハ光緒十八年ヨリ僧續
朗直接催收シ恣ニ増租シタルニヨリ人民ヨリ訴

外務省

ヘアリ福驛巡道ハ判決ヲ下シ續朗ノ徵租
權ヲ奪ヒ爾来三陵衙門ノ委員ヲシテ徵收セ
シメ寺僧ニ直接經理ヲ許ササルコトナレリ

(五)住民ハ創墾料種ニ或ハ轉々取引ニ之ニヨリテ
自家ノ生計ヲ立テ各自自己ノ財産ト同一視
セリ加之高租地域中ニハ單ニ該廟地ノミナラ
ズ紅冊、餘租、隨欵、外科等各地ヲ包
括シ居リ之等ニ付テハ各人ハ共ニ戸管地照ヲ

領有之居り以テ其ノ私産タルヲ証スルニ足ル本
 瑞ハ冒名シテ之等ヲ私賣シタルモノ^{ニシテ}斯^{ニシテ}如クハ
 従来官田ヲ開墾シタルモノ一瞬ニシテ空トナル
 ノミナラス世襲シ来ル私田亦喪失スルコトトナ
 ルベシ

(六) 法令内第六十六号教令之第十條ニ依リハ
 寺院住持僧於寺廟財産不得抵押或
 處分之トアリ本瑞ハ決シテ處分權ヲ有セザル
 ナリ

外務省

(七) 本瑞ハ前述ノ如ク處分權ナク當人ハ本ヨリ濱
 名^{其ノ事係リ詳}知^{何等係重シ}ツク^{取調フル所ナクシテ}契約シ
 鉅款ヲ授受シ然カモ一人ノ立會人ナシ本瑞ハ廟
 地ヲ盜租シタムモノト云フヘシ同人^{其ノ}不正行為ニ依
 リ罪セラレシコトヲ恐レ遁走シテ出テス又契約ハ正
 式ニ支那官憲ニ立案セラシム旁々本契約ハ違
 法無効ナリ且建標ノ際ニハ契約當事者モ官

憲モ同道セス會社勝手ニ為スカ如キハ不都合モ甚シ

右ニ對シ會社側抗議ノ要点左ノ如シ

(一) 清皇室賜與ノ土地ハ悉ク清室ノ私産ナリトセハ幾多勅建寺院ノ廟産モ王府ノ領モ旗人ノ土地モ皆古昔皇室ヨリ下賜サレタルモノナルニ付皇室ノ私産ニ編入セラレサレハカラス之嚮ニ滿洲ノミニ限ラス全領土ニ亘レル大問題ナリ宣如

外 省
況ンヤ此論ハ單ニ
斯理アラシヤ太平寺ニノミ限ルユトナリトハ殆

ト理由ヲナサス

(二) 三陵衙門ニ存スル地冊ハ乾隆ノ旧冊ニシテ然カモ副本ナリ其ノ正冊ハ却テ太平寺ニ保存シアリタリ加之衙門ノ官吏ハ近頃迄光緒十八年ノ新地冊及最近奉天財政廳發給ノ有粮地ニ對シ新契紙並新民府廳ノ下附セン納稅領收証ノ該寺ニ現存スルコトヲ知ラ

サリキ而シテ地冊ハ土地ノ領有權者ニ於テ保管
 スヘキモノナリ由來大照トモ地照ト云フハ前清
 時代ニ重ニ民地ニ對シテ下附シタルモノニシテ旗地
 莊地官地欽賜地等ニ對シテハ紅冊ヲ下附
 シテ証據トシタルナリ太平寺ニ其寺領タルコト
 ヲ証明スヘキ紅冊アリシモ地照ノ存セサル^ハ當然
 ナリ當會社カ太平寺ヨリ引繼タル書類中ニ
 光緒二十一年一月初一日吉立坐落巨流河

外務省

取平安保土等處地租花戸領名清冊ト
 題スル徵租台帳アリ之ニ依ルモ該寺ニ於テ直接
 徵租シ居リタルハ顯著ナル事實ナリ

(三) 乾隆ノ旧冊ニモ光緒ノ新冊ニモ太平寺香資
 地トアリ昭陵官地ナル稱呼ナシ民國ニ至リ住
 持ノ懦弱ナルニ乘シ奸官賊民等寺領ヲ横奪
 セントシ昭陵官地ト稱シ以テ小作料ヲ徵收セ
 ルナリ皇產タルノ証據トスルニ足ラス

6.

(四) 交渉使ノ抗議ヲ善意ニ解スルモ謂ハ、當時ノ
住持タル續朗カ苛酷ナル誅求ヲナシタル爲メ當人ニ
對スル處分ヲ爲シタル迄ニテ該寺カ其ノ廟産ノ領
有權ヲ剝奪セラレタルハ非ス又光緒二十六年續
朗他界シタル際現住持本瑞尚幼ナリシカハ
昭陵守護寺ナル關係上該寺廟ヲ保護スル
意味ニテ三陵衙門ノ吏員カ代リテ便宜徵租
ヲ行ヒタルノニ現ニ民國元年ニ於テモ三陵

外 務 省

衙門ノ書記數名本瑞ヲ帶同シテ農場ニ
至リ佃租ヲ徵收シタル事實アリ
若シ果シテ光緒十八年ニ於テ太平寺領地ノ
徵租權カ三陵衙門ノ手ニ移リタリトセハ同衙
門ニ於テ徵租台帳ノ備付アルハキ筈ナルニナラ
光緒十八年ニ太平寺ニ交附セラレタル紅冊ノ
副本スラ同衙門ニ備付ナシ

(六) 寺院管理暫行規則第二條ニ「寺院財産管

理由其任持主之レトアリ高租ハ一ノ管理行
為ニ外ナラス

外務省

1-1906

0337

第 門

秘

高租契約要略

太平寺廟地高租問題

(大正四年四月末)

太平寺廟地高租契約、大正四年八月

十八日南滿洲大興合名會社、瀋陽名寛佐

(元美東都督府經理部長)ト太平寺之主

親本瑞ト同締結セシタルモノシテ要點左

ノ如シ

一 高租地 遼中縣小新民屯ノ西方十八ヶ村

ヲ包含ス東西三十五支里南共二十支里

ノ全區域地四百二十六地(約我ニ百中十ヶ所)

一 高租期間 日支條約實施ノ日ヨリ二十六年

一 高租料 日貨金十萬圓即時拂

一 利益分配 純収益ノ一割ヲ本瑞ニ毎年一交

付ス

一 圖書提供 本瑞ハ高租地域ヲ明確ニシ

本契約ノ證據トシテ、乾隆四十三年

四月二十四日作製太平寺香堂地四ヶ

支那側ノ抗議

抗議及反駁ノ
諸点ニ関シ別
紙ヲ添付ス

同ノ其他ノ書款ヲ提供スルコト

一期限満了セシム条件ニテ繼續ス

支那側ヨリ本件土地ハ前清皇室ノ私産ニ屬

シ本端ノ行為ハ不法ニシテ又濠名カニシテ買取

タルハ条約ニモ牴觸スルニ付契約解除方^{トモ}ハ任

事奉天総領事代理ニ申裁ス^ル 然レトモ本契

約ハ支那側ノ知悉カ如キ^{トモ} 遼寧省契約ニ由リシ

テ高祖契約ナリハ不都合ナキニ付夫田ヨリ一姓及

外務省

取ル所アリタリ 然レニ其後實地丈量ニ着手

セントスルヤ楊希之其他^ノ關係各地住民ノ總代

表ノ願出ニヨリ丈量ニ着手支那側ヨリ交渉

アリ又更ニ本件土地ハ完全ニ前清皇室ノ所

有ニ屬スルノ確証アリ本端ハ何等處分權ナキ

者ニシテ只香茅料^{トシテ} 僅カニ毎年二百餘元

ヲ收メタルニ過キス 然レニ高祖契約ヲ締結シタ

ルハ濠名等ノ欺干也ナリ 然レモ本件交渉未

本瑞、隠匿

楊希三殺害、
凡説

決、間と濱名尋も多数ヲ泊シテ測量ニ着手
セントスルハ吾等都合ナシテ盧置ニ付立々ト測量
ヲ停止シ本瑞ヲ逮捕且訊問ノと解決ヲ因テ
シフトラ申出タリ 先ニ本瑞ハ身辺危険ナルコ
トノ關係者ニ於テ同人ヲ朝鮮ニ隠匿シ置キ
タリ 然ルニ大正五年五月下旬前記反對主張
者ヨリ楊希三及其子馬城ニ揚出殺害セシ
タル報、報アリシカ濱名ハ矢田ニ対シ場ハ自分
等、使用スル支那人達ヨリモ要スル塔ニ付近
キ奴ニ或ハ殺害セシム、ヤミ計ヲ雖トモ内話ロシ
タルコトヨリ、本殺害ハ大興会社、楊族ニヨリシ
モノナラントシ、凡説高カリキ

村民等ハ標本建設ニ対シ抗議ヲナシ又
官憲、後接、下ニ示威的態度ニ出テ暴行ニモ
訴ントシ邦人ヲ關係者ハ曹場内ニ立入ルヲ免
陸ヲ懲スルニテテ殊始トテ下ニ標本ナキニテテ

村民、反対

会社・威圧手段

六濱名等、威圧手段に依りんとし、先づ山縣
宗典官出張所設置に遼中警備事戒節^を、
海三移居に護身用軍銃携帯^を、
出づる会社尚進^テ或ハ印刷物ヲ配布^シ、
小作証^ニ調印^ヲ強^制ス等、
是等高度手段に出ず
一方村民ノ騷擾ヲ誇大ニ報告^{シテ}我官憲兵接
助ヲホメ又会社、皆後^ニ日本政府アリ、
警備官
軍隊ハ直々ニ出動ス^ニ、
警備官

外務省

カ脅威^ニ以テ高租契約^ノ、
事態斯ノ如ク^ハ支那側^ヲ、
リシカ^ハ本件土地^ノ、
高租契約^ニ或^ハ或^ハ、
カ其^ノ良理^ノ、
ハ有効ナル^ト、
夕リ其後六月下旬ニ至リ、
ウ張^ニ交渉^{シタル}、
外務省

張作霖^ニ平和解決^ノ意アリ

的なるより社会之注意ヲ加フべき事申出ル
寧ろ平和解決ヲ希望シ村民日、鑛務ニ如目ム
ルカ如シ 依テ矣田領事ハ、其後者ニ對シ本件解
決迄村民ノ反感ヲ挑發スルカ如キ積極的作業
ヲ見合ハズ様 劃示違ヒタリ

村民、審判廳
ニハテ申付
意アリ

此項ニテ有問題ニ依テ紛糾シ居テ、解決ニ向リサ
ルニ付村民側ニテハ、其ノ天、高等審判廳ニ對
シテ提訴シ裁判廷ニテ申付トスルノ意向アリ

外務省

抱クニ云々

村民、社会、衝
突

其後又農傷ノ境界標木ニ三本村民ノ為メニ
毀換セラルルニ付、同社ノ威信ト建直ニ方承認
アリ、被告申出タルニテ、主田領事ハ、單ニ建直
ニ止メ村民ノ騷擾セシメサルヲ条件トシ(軍銃、携
行ヲ許サズ)ニ承諾ヲ得タルニテ、社会側ニテハ、領
事ノ承諾ヲ得タルヲ條件トシ、本邦人三十餘名ヲ
派シテ建直ノ監督スルヲ標木ヲ建テ更ニ力

迫り印刷物ヲ配布シ之ヲ為村民ノ激昂ヲ招キ
一名ノ人夫斃ルニ至リ 依テ一行
ハ被害者ヲ捜索引致シ引揚ケントシ之際村
民等ハ之ヲ阻ムサンカ爲一行ニ對シ一斉射撃
ヲ爲ス等暴行ヲ試ミシカ一行ニ避ケテ帰
着シタルカ其後村民大暴行シテ農場ヲ襲撃ス
レトノ風説傳ハリタルハ遼陽鎮事館ヨリ警
官三名出立ニ警戒シ大事ナキヲ得ル 又會

外務省

社ニテ事情ヲ知ラサルニ乘シ守備隊ヲ説キ遼中
縣ニ行軍セシメ以テ村民ノ威圧ニ利用セント計
画シタルコトモアリ只官署脅迫手段ヲ以テ威
圧セントスルニ在ルコト明白トナレリ 主田録事報告
本件ハ警署立案又ハ軍隊カヲ以テ解決スルノ不可
能ナルハ勿論シテ又支那官憲ヲシテ村民ノ反
對ニモ拘ララズ高圧手段ニ出テ以テ土地ノ自
有ヲ確實ナラシムルコト亦甚困難ナルハ實行シ

解決次第ニ言
主田録事意見

会社、宝隆、
その他
二付録田、申出

得る方法として残る。(一)支那官憲より高租
権を回復せしむ。(二)日支共同土地裁判に付
る力又(三)会社より村民と妥協の途を講せし
むるに在り。(一)と就ては会社は法の全趣を
要する(二)と支那側の善行を期する(三)と会社は
内ニ暴露を恐るるに避るる(三)妥協方法
を遂行するに於ては買収方法、他ノ
高租を要する及ぶるの弊を本件は日支

外務省

新條約ニ基き共同裁判より公平に審理する
こと最モ得策ナリトシ
五月十日次録田近太郎及濱名寛依本者
ノ際實際交付しん約五畝四ナリト(乞之在
奉天総領事館ノ調査ニ依り契約締結ノ日ニ
新地券入手費用トシテ小洋銀三千六百圓及
四年九月高租料トシテ小洋銀二万四千圓ヲ
交付シタルニシテ之レヲ當時ノ相場ニ換

土地裁判ニ関スル
支那例提議

兼スルハ一万七千九百四ナリト及本件関係十八
ヶ村ノ代表者等ハ其會合ニ於テ會社トシテ毎年
有カトスルノ意見ナリト云々楊希三ハ一時奉
天ノ某旅長ノ下ニ潜匿シ居ルモ最近ハ新民
化ニ歸來シ健在ナル報等ヲ談話シタリ 依テ
本省ヨリハ此事實証調方ヲ大田ニ訓令シ
且大局ニ害ヲ及セザル解決方法アルハ相当援助
ヲ與フニモ支ナキ方ヲ訓示シタリ 殷田ニ於
テ後再々本省標本建設ニ對シ村民ノ暴行ニ對シ
任後分發セタリ

外務省

支那例ヨリハ前記會社ノ標本建設布告文ノ
配布支那人ノ逮捕等ニ付抗議ヲ申出テ事ヲ
又十一月馬六甲署長ハ去回領事ヲ來訪シ
標本タル土地問題ニ付關係村民ヨリノ訴因出
テ了双方ノ主張ヲ公平ニ審理スル為土地會審
裁判ニ付テ解決シ度ノ手續等未定ナルモ

先例トセザルニ於テハ其支サカレト申出タルニ付夫
 田領事ヨリ申請訓了リシカモ其時大興会社ノ本
 社ニハ実権利明シモ皆ラサリシニ付飯田ハ実地調
 査ノ為メ出端ノ各ナリシカハ夫田領事ト充テ
 意見ヲ交換セシムコトニ裁判ノ申出ニ対シテハ其
 分回答ヲ覆セサルノ様田訓セリ 然ルニ其後
 奉天ヨリ菊池中依帰来スルモノナリタルニ付飯
 田ノ奉天行ハ一時中止トナリ 東京ニテ飯田ト會
 談シ上菊池中依ハ小池政務局長ト協議ノ結果
 大興会社ノ共同審判ニ應ズルヲ欲セサル方ヲ
 申入レテ先方ノ出方如何ヲ見ルコトニ會々其旨ヲ
 望ミテ協合ニ會社例ヲ更ニ四五歩引退
 進給ニ支ナキ旨飯田自身言明シタル次第ナレ
 ば其旨其旨ノ方法ニ依リ解決ヲ見ル様夫田領事
 ニ訓令シタリ

然ルニ村民代表者等ハ濠名ヲ相手取リ遼陽地方

審判廳、土地の戻りに對し訴訟ヲ提起シ、同審
判廳に於て我方に對シ會審方照會シ、未だ付
我方に於テハ審判廳ヲ認メサル行懸モアルコトヲ
公文ヲ差戻シ、之ニ對シ地方官ヨリ經テ照會ア
リタルに付、古兵衛事務代理ヨリ本省に請
訓ナリ。之に對シ本省に近々飯田事務長に赴キ
ツキニ付、夫レ迄ハ其儘ト爲シ置カシムルコトニ決シタ
リ。飯田に會シ、大正六年四月末、出發スルコトナリタル

外務省

由ナリ

附
楊希三生死

楊希三父子ノ行衛ニ對シ、署ニ照會方訓
令レタルコトアリシカ、其後、矢田領事ノ奉信ニ依
ルニ、楊ハ會社ノ高利及對違勅中、以曆四
月二十三日夕、支那人楊父子ニ告ケテ曰ク、大
興會社ハ自分尋テテ、貴方尋テテ殺害セシメ
ント計畫中ナルカ、何等恨モナキ貴下等ヲ
殺スニ忍ビ得サルニ付、殺害ララシムルモノト報

告也約ニ從ヒニ万先ノ格取ヲ得ルノ一等
兩得ナリト申入ルリシカ楊ハ深ク信ヲ措カサ
リシニ四月二十四日果シテ馬賊ヲ能シ楊父
子ハ身ヲ以テ逃レ新民縣ニ潜伏シ收獲期
ニ至リテ歸村セル由ナリ 楊父子ハ前後ノ
事情ヲ以テ自尋ヲ殺害セントスル
ヲ案シ大ニ恐怖ノ念ヲ抱キ家人ヲ以テ自
分尋ハ馬賊ニ捕ラレ遂ニ殺害セラル
コトヲ吹聴センノ身ヲ潜メ居ル次第ナリト
云フ楊父子殺害ノ風説ハ斯ノ如クシテ
生シタルモノニシテ實際ハ尚生存シ居ルカ
ルリ又ハ本社カ楊父子殺害ノ事有ル
疾ハルモ事實ニ定ムルカ如シ

尚矢田領事ノ所見ニ依リ一般商祖ニ對シ奉天省政府

ノ意向ハ必スレモ一律抑付セントスルニ出スレテ居ル事

續ニヨリ相當地價ヲ以テ商租セントスルモノニ對シテハ

便宜、供共う措マサル方繰返シ声明セリ然ルニ
従来屬々計画セラレタル商租ハ其ノ商租者
カ多ク信用薄キ日本人シテ古証文ヲ探出
シ要細ナル金額ニテ買入レ有名多寡凡証
書ノ名義人ト契約ヲ締結シ且種々惡辣手
段ヲ弄レテ實際ト農民ノ經濟状態ニ大打
撃ヲ被ラレムルモノシテ支那官憲カ之等ノ
契約ノ成之ヲ妨碍セシムルハ必スシモ多理ナ
ラス本件ノ如キモ茲後者ニ屬スルカ如クナレハ日
本官憲カ援助ヲ與フ^{サレ結果}会社例ニ非存利ト解
決ヲ見サルトモ必スシモ他ノ善良ナル商租ニ対シ
障碍ヲ醸スノ虞アリト断言ス能ハスト

外務省

電送第四千二百一十二號
五年五月十一日午後五時十分發

第九門

電信課長十五

十占

政務局長

收

第一課

廿

東京
五月十一日

子ノ唯ニ終ルル程ニ...

吉野

夫田總領事代理

第五号

吉野市廟地開闢ニ関ス

菊地中佐近々帰京、上詳細共友

ニ書付、答ニ付其結果如何分、以紙中付

引飯田ニ通報シ来ルマテハ飯田、出發ハ

見合ハス下、ナレリ右ハ以て送^送ナシ

為考電第五〇号及修電第一九九号ハ

本報トテ参考トシテ略号、修遼陽ニ邦送アリ

ク後、維トモ中修買係以修並ニ電信ハ

米在遼陽ニ送附ナル、檢査計、改修ニ